

2. ホロコーストからの組曲……………M. グールド
Suite from “Holocaust” ……………M. Gould
3. クラウン イムペリアル……………W. ウォルトン
Crown Imperial ……………W. Walton
4. 組曲“展覧会の絵”……………M. P. ムソルグスキー
Suite “Pictures at an Exhibition”…………M. Moussorgsky
arr. by M. Hindsley

指揮 小田野 宏之

演奏 東京芸術大学音楽学部管打楽器専攻学生
Tokyo Geijutsu Daigaku Wind Ensemble



小田野宏之

第3節 オペラ定期公演

すでに『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第1巻(541~552頁)で触れたように、本学におけるオペラ公演は、明治36年(1903)の「オルフオイス」以来途絶えていた。しかしその後も、明治37年には軍歌を基調とした「露営の夢」が北村季晴により作詞作曲され、音楽劇として上演された。また翌38年には、能に取材した「羽衣」が小松耕輔により作詞作曲されて舞台にかけられるなど、新しい音楽劇を創作し、発表する試みは続

いている。

大正年間には露西亜歌劇、カーピ・イタリア歌劇団が来日してわが国の楽界をおおいに刺激した。昭和になるとオペラ運動が本格化する。放送歌劇、日本楽劇協会の活動に続き、昭和9年には藤原歌劇団が誕生した。戦後の昭和20年には長門美保歌劇団、24年には関西歌劇団が相次いで結成されている。

東京音楽学校では、昭和12年10月、学友会の第100回演奏会で、教官と生徒が力を合わせて、橋本國彦指揮のもとで「魔弾の射手」を演奏会形式により上演した。まずまずの成功だったようである。時代は昭和12年、出演予定になっていた教師の1人が召集され、生徒たちの見送りを受けて出征するという一幕もあった。このような時勢に若い情熱を精一杯注ぎ、合宿までして練習を重ね、本番にこぎつけた生徒たちの熱狂と充実感は大抵のものではなかったようである。

音楽学部発足後の昭和27年、二期会が結成された。東京音楽学校出身者が中心となった二期会の結成は、本学に少なからぬ影響を及ぼした。二期会同人で当時音楽学部助教授でもあった柴田陸陸(元本学名誉教授、昭和63年逝去)、畑中良輔(本学名誉教授)、中山悌一(元本学教授)らは、プロの舞台に通用するような歌い手を大学で育てたいと考え、本学におけるオペラ教育の実現に情熱を注いだ。

一方学生たちも、オペラの授業が正規に開設されるのを待ちきれずに自主的な練習を開始した。大学からは練習場所も何の設備も提供されなかったが、放課後の数時間、学生たちは空いている教室で、大道具小道具の代わりに床にチョークで階段や椅子を描くなどして練習を重ね、学内の芸術祭で成果を発表した。当時はオペラのカリキュラムが確立していなかったが、学生たちの自主的な練習は許されていた。

大学側も、声楽科の学生がオペラを学ぶことに異論はなかったものの、いざオペラを公の舞台で発表する段になると、経済的な問題、オーケストラや各部門のスタッフの問題など数々の困難に突きあたった。そればかりか、当時は学内の教官はもとより、声楽科内部でもオペラ公演には反対す

る声が強かったのである。現在でこそ、練習所もあり定期公演も恒例の行事となっているが、このような形が整うまでには、オペラを推進する一部の教官たちの長い孤独な闘いと地道な努力があったことは想像に難くない。そして、学生たちの強い希望が大きな支えとなっていたことも言を俟たないであろう。

昭和30年、ようやくニコラ・ルッチがオペラの指揮教官として迎えられ、翌31年4月にはオペラの第1回公演「椿姫」が行われる運びとなった。しかし、学内での体制作りは追いつかず、結局、予算も計上されないままに終わった。いわば自主性に委ねられた格好だったのである。このため学内には、ピアノ伴奏で衣裳は着けず、舞台装置無しもやむなしとの声が根強かったが、民間企業の支援を受けてどうにか公演にこぎ着けた。楽器会社からの寄付を募り、東京ヴィデオ・ホールにマネージメントを依頼した。そして株式会社寿屋（今日のサントリー株式会社）がスポンサーとなり、TBSのラジオ番組「百万人の音楽」で放送されることとなったため、放送料や入場券の収益で舞台制作や衣裳・照明などの費用をどうにか賄うことができた。

「椿姫」では4年生が独唱、3年生が合唱を受け持ち、オーケストラも学生によって編成された。指揮は、指揮科教官の金子登、山田一雄が担当した。大学公認の半ば自主公演であったこの時期を考えると、演出の長沼廣光（現音楽学部教授）のように、大学とは正式の契約もないままに、学内からの要請に応じて奔走した外部の人々の協力があったことを忘れることはできない。

大がかりな「魔笛」に取り組んだ第5回（昭和34年）頃から、学部をあげての組織作りへと一歩近づいた。オペラ公演は、その後も毎年着実な成長を遂げ、次第に大学側もオペラ公演を積極的に支援するようになる。第6回までは第1回と同様の経済的な苦勞を余儀なくされたが、第7回公演（昭和36年）から、正式に音楽学部の主催となり、同時に初めてカリキュラムのうえでオペラの講義が開講された。また第7回にヤン・ポッパー（指揮）、第8回にゲルハルト・ヒュッシュ（演出）、第9回には再びニコ

ラ・ルッチ（総監督および指揮）が迎えられたことは画期的な出来事であった。この3年間で芸大オペラは定着し、急成長を遂げたのである。

回を重ねるうちに、練習場所も教室では不都合が生じ、通称ピンポン小屋——戦時中は銃器庫だったところが戦後卓球の練習場となっていたもの——に移った。風の吹き抜ける、板張りの木造の建物であった。第8回公演の後、現在の第3ホールができ、ようやく練習場が整うことになる。

オペラ公演はその後、「芸大オペラ卒業発表」「オペラ研究発表」「オペラ定期発表」と名称を変えて続けられた。昭和39年、音楽学部が講座制に移行する際、第五講座がオペラとなり、昭和43年にオペラ研究部が認可され、今日に至っている。またこの年には芸大オペラにとって大きな進展があった。オペラ界で活躍中のスタッフや歌手を、オペラ研究部の講師として迎えることができるようになったのである。その分野は、歌手、演出、指揮、コーチ、舞台関係に及び、現在、40人ほど在籍している。歌手は教えるのではなく、オペラの中で学生と一緒に歌うという任にあたっている。

昭和54年には芸大オペラも第25回公演を迎えた。このときは、昭和12年の「魔弾の射手」で学生として大感激の舞台を踏んだ柴田陸陸が、清水脩作曲の「修禪寺物語」を指揮し、翌春、停年退官された。音楽学部が創立100周年を迎えた昭和62年にはオペラ研究部の定期公演以外に、記念演奏会として、「オルフェオとエウリディーチェ」が旧東京音楽学校奏楽堂で上演されている（記念演奏会およびこの年の第33回定期公演のプログラムに関しては本書第3部第5章を参照）。

これまでのオペラ公演を振り返ってみると、毎回それぞれに重要な意味を持っている。なかでも何かと苦勞の絶えなかった第1回は、関係者にとってはとりわけ感慨深いものがある。本邦初演された曲もいくつかある。ロッシーニ作曲「アルジェリアのイタリア人」（第13回）、マスカーニ作曲「ロドレッタ」（第18回）、モーツァルト作曲「かまと娘」（第19回）、チレア作曲「アルの女」（第22回）、ジョルダナーノ作曲「メーセ・マリアーノ」（第23回）、ロルツィング作曲「密猟者」（第26回）、ロッシーニ作曲「試金石」（第28回）はいずれもそうである。また清水脩作曲の「修禪寺

物語」において、歌舞伎の模倣ではないオペラ「修禪寺物語」の確立を目指し、作曲家と演出家の共同作業が行われたことは貴重な経験となっている。

なおこの項をまとめるにあたり、声楽第五講座（オペラ）の長沼廣光教授、原田茂生教授、高橋大海教授、平野忠彦助教授に数々のご助言を頂いた。

第1回

東京芸術大学音楽学部第1回歌劇公演

[1956年] 4月18日・19日 1時 日比谷公会堂

主催 東京芸術大学音楽学部後援会

マネージメント K. K. ラジオ・テレビ・センター

『椿姫』の上演にあたって

東京芸術大学 加藤成之
音楽学部長

このたび東京芸術大学音楽学部の学生がトラヴィアータを公演することとなった。我が国の音楽は非常な進歩をとげてピアノなどは世界の水準に近づいたといつてよいくらいの発達をとげた。オペラはどうであろうか。近年多くの熱心な人々によつて隆盛になつたがその結果はまだ立派になつたとはいえない。その困難はオペラというものが総合芸術であるのでそれがむずかしいのであろう。歌が如何によく出来ても劇を下^{（マ）}手であつてはだめであるし、オーケストラ、背景、照明等あらゆる部門が立派でなければならないからである。

そういう点で進歩しつつあるが総合芸術としてはまだあきたらぬ所が多いのである。我が東京芸術大学においてはまだオペラ科の独立はないが大学として根本的に研究をなすべく、まずその第一歩としてここに「椿姫」をとりあげた次第である。なるべく多くの学生に体験をさせる意味で各役も幕ごとに人が変つて演ずるといふような演出がこのたびは行われる。イタリヤから来られたルッチ教授はオペラの経験も深くオーケストラの指揮も立派である。

私は今から30余年前、1923年6月22日パリのオペラコミック座で261回目のトラヴィアータをはじめて見てから3年程の間に10数回このオペラを見た。はじめて見たときのヴィオレッタはロシアから来たマリア・クズネゾフ夫人であつた。実にすぐれた芸であつた。その翌日モンマルトルの墓地に「椿姫」のモデルといわれるアルホンジース・ブルシスの墓に詣たことも思い出となつた。トラヴィアータはカルメンと共に私の最も愛好するオペラの一つで如何にもフランス的な美しい旋律にとみロマンティックの最もパリの的のものである。

このたびの試演はもとより完全なものではないが、芸大オペラの第一歩として、どうかオペラファンの方々の御声援をお願いしたいと思う。



ルッチと東京芸大学生管弦楽団

—ごあいさつ—

Sento il dovere rivolgere un devoto ringraziamento alla Illustrate Presidenza della Accademia d'Arte UENO per avermi dato l'onore d'insegnare opera lirica nella scuola di musica. Questa sera presento per la prima volta al gentile pubblico un saggio d'opera cantata ed eseguita da tutti allievi.

Per questa rappresentazione ringrazio Kita-san, et Shibata-san per la loro affettuosa collaborazione e tutti coloro che mi hanno aiutato per portare a termine lo spettacolo—Richiamo l'attenzione di tutti a non giudicare con troppo severità— Nicola Rucci

芸大オペラの初公演によせて

東京芸術大学
音楽学部教授 城多又兵衛

昭和4年だったと思う。亡くなられたF教授から手紙をいただいて松平里子さんのオペラの音楽会に出るようにとのことであつた。

当時はイタリア・オペラと銘打って毎年初春に帝劇で上演するもの以外にはオペラと名のつくものは見ることも出来ず、聴くことも出来なかつたときだから驚いた。しかし先輩である松平さんの温い御指導で「椿姫」を全曲、オーケストラ伴奏で日比谷公会堂で歌つた。日比谷公会堂のステージの難壇が初めて出来たのはこの時だった。その後上野の音楽学校でもオペラはやらなければとは思っていたらしいが二、三のオペラを演奏会形式で歌つたにすぎなかつた。

戦後になって、一般の声も上野に反響してか、オペラをやらなければということになり、学則の片すみにオペラを履修する項目を入れたが実現は容易なことではない。なかなか進行しないので一案としてオペラ研究部を作つて、先輩や学内の人々でやろうとしたが、これももめてオジヤンになつてしまつた。オペラ研究部はおかしなものだという人や、ピアノの伴奏で動きながらステージで歌えばよいという人や、オペラと縁の遠い話ばかりが飛び出して流れてしまつた。偶然にも宮崎大学のルッチ先生が芸大に訪ねて来られた時「椿姫」のさわりを教えてもらったのが縁になつて今日の公演になつた。

芸大オペラの公演については随分反対もあるが、この際思い切つてやらないと20年以前のオペラ演奏会形式の演奏から一步も踏み出せないことを憂えて無謀の公演をするのである。学内は勿論、学外の大きな御厚意によつて同情的公演が出来ることを涙の出るほど喜んでいる。宣伝から公演の費用を演奏料なしで約百万近くもかかるのを切符の売上げで何とかしようという無理な企ても、将来、オペラ研究の捨石としたいのである。大方の御同情を感謝しつつ。

オペラ科誕生について

川崎 静子

芸大オペラ科の発表会がいよいよ実現されることになり、おめでとうご

ざいます。

まず芸大にオペラ科が出来たということが私の学生時代から考えると夢のような出来ごとと思えると同時に、とても嬉しいことだと思います。私が在学2年位の時、グルリット氏がドイツから来られたばかりで先生もなにかオペラのアンサンブルがなさりたいようで柴田氏のテノール、磯村澄子氏のソプラノ、私のアルトで「アイーダ」の二重唱、三重唱と、いろいろレッスンを受け、始めてオペラのアンサンブルの楽しさを味わつたものでした。すると慾が出て、衣装を着け、メーキャップして全曲を上演できたらなどと、集まるたびに話し合つたものでしたが、なにしろ当時昭和14年ごろは、オペラに対する社会の態度も冷ややかで、学校長は勿論のこと言下に反対、学生が顔に白粉を塗つたり芝居したりするなど言語道断とのおしかりをうけるようなありさまで、オペラを実現させるなど夢の夢と思ひあきらめていたものでした。それが終戦後社会状態も変りオペラ熱も盛んになり、今日に至つたのですがその時分のことを思うと只今の芸大の方針など全く夢のようだとはいいたくなるのです。

実際に学校を卒業し、社会に出てすぐオペラに抜てきされる場合何んの訓練も知識も無いでくの棒は我々の年代にとどめ、これからの歌手は卒業すると同時に、自分に適したオペラの一つ二つは身につけている位になれる事を望んで止みません。その上実際に経験された先生方諸先輩から手取り足取りして、指導を受けられる幸福を身につけて若い人達りの立派な舞台を聴かせ、見させて下さる事を期待して居ります。

第1回発表公演に当り

柴田 睦 陸

芸術大学は営利を伴わなければならない教育機関でもなければ、芸術の社会性を無視した独善に依つて運営されるべき性質のものでもない。芸術の探究——芸術の本質に対する深い洞察と、国の進むべき芸術的理想のために、利害感情を無視してその時代に当らねばならない筈のものである。

それが何故、かつて音楽学校時代より現在に至るまで歌劇部の設置を見なかつたのであろうか？

少なくとも歌劇に関する限り、封建的で無智な因襲の犠牲でしかあり得なかつた音楽学校時代はさておき、芸術大学と名のつく時代となつても、音楽学部の中に歌劇の正常な発展が望めなかつたのは一体何の罪だろう？ ようやくにして将来に希望を持ち得た歌劇研究部も、「ファウストの却罰」の初演に対する部内の批判は研究部を有名無実のものとし、大学に協力しようとして純粋な情熱を燃やした有能な卒業生達を落胆させただけで終つたのである。

勿論、研究部最初の責任者であつた私の責任がどんなに大きかつたかは、私自身強く反省する所ではあるが、研究部長を交代してこのかた何らの動きもない事実を考える時、果してどちらが正しいのか私は判断に迷ふことさえある。

さもあらばあれ、此処に再び将来の講座制を目的として非公認の歌劇講座試案が声楽部に作られ、その担当者として、歌劇指揮者（伊太利）ニコラ・ルツチ氏を補佐する事になつた私は、歌劇が声楽の中に含まれないもの、歌劇を知らずに声楽の勉強が出来るものとの結論にならない限り、そして私が大学に奉職する限り、学内に歌劇部の発芽発展を念願し努力するであろうし、声楽部及び声楽部学生の支持があるかぎり、私は私の全生命を賭してそれらの期待に添うべく行動する覚悟である。

「椿姫」はそうした準備のもとに昨年4月から当時の4年生によつて強力に練習されて来た。勿論、本格的な形に依らないで、ピアノ伴奏に依るつましやかな試演会にするべきであるとの温健^(マツ)で常識的な意見は、最後迄相当に強かつたのである。しかし私は原因が何にあるのかはさておきそうした形式では、此の道に足をふみ入れた者でなければ理解出来ない程の苦しさ^(マツ)に耐えて、長期の勉強をしようとする意慾をもつ学生が居ない点を考えざるを得ないのである。

私は音楽学部が毎年管弦楽の定期公演をもつと同じに、歌劇の本格的な公演を行うことが何故不適當であるかわからない。

既に3年の組は、大学が組織的な歌劇の授業を認める前に、一学級の意志として授業外に自発的に集つて練習をばげみ、芸術祭余興公演の名目で

自分達の歌劇を発表している。こうした現実の動きに対して、私達は無感動であつてはならないと思う。

本公演は、未だ一文の予算も計上されないため、出演の学生や、それに関係するすべての人々の犠牲において行ふものである。当然私たちの意図を理解してくれる強力な事業の後援者が居なければならなかつたが、真先に、ラジオ・テレビ・センターがマネージメント一切を引受けてくれたことは感謝の他はない。

当初、10月中旬を予定していたが延期のやむなきに至り、次いで1月から3月中旬となつて最後に4月の日取りが確定したのであるが、日取りの変更のたびに気の抜けたようになる学生達の顔は、担当者としてどんなに苦しかつたかしのれない。卒業証書を手にしてからの演奏は何かと不便のある事とは思ふが、丸1年を勉強しつづけて来た人達に、此の公演はせめてものはなむけと思つている。正直にいつて私は2月、3月及4月上旬の休暇を返上して曾つて、経験しなかつた重労働も、少なくとも精神的には何の苦痛も感じなく合唱に独唱にと交代する若い人々との仕事にむしろ生き甲斐を感じたのであるが、それらは合唱(3年)、独唱(4年)を担当する学生諸君の純粋な熱情に引きづられたためであるといひ切れる事が出来るのである。

その間、演奏部主任兎東教官、管弦楽部委員諸氏、声楽部教官諸氏の積極的な御好意を深く感謝している所であるが、特に声楽部主任城多又兵衛教官の熱意ある御協力は本公演誕生の礎石として、忘れることの出来ないものであると信じている。

合唱は2月休暇に入ると同時に、独唱者は3月入試終了後、管弦楽は合唱・独唱と共に4月2日から毎日それぞれ楽しい春休みを返上して猛練習に参加したのであるが、いずれも歌劇に関しては初めての者ばかりである。

精力的で厳しいルツチ氏の指導にどこまでついて行かれるかは幕を上げてみなければ不明であるが、此の公演は、次の公演のより良い体験として生かすことが出来ることにより、そしてそれは、正しい音楽のあり方、声

楽の本質を認識する公正な知識を得ることに価値を見出すのである。此の公演を苦しみの後に体験し得た学生諸君は、その体験に依つて各々が大きな飛躍を遂げたであろう事を各々と共に喜んではいるが、此の制度が永続し、最も近い将来に歌劇の新しい講座、或は歌劇部として発展する時にこそ、本当に報いられたのであると私はいいたいのである。

芸術の探究は最も厳しい茨の道である。一朝にして満足すべき効果の現われることを誰しも望んではいない。而し学生の中には、此の公演によつて歌劇を経験する以外、永久に舞台に上らない者もいるのである。そうした者と共しに一同は自分達の与えられたパートを能力の限界迄燃焼させようと努力している。私はその尊い情熱に打たれ、練習の時も、又独り床につく時も此の公演が成功する事を祈り続けている。

本公演の演出は、ルツチ氏の意図に従い、その線に添つて栗山昌良氏にかためて戴く方針をとつた。又舞台もルツチ氏のアイデアであつて、進んで御協力下さつた北川勇氏にお願いしたものである。

原詞使用について、邦訳歌詞を使用すべきであるとの御意見もあつたが、全面的にルツチ氏の指導を受ける立場からも又より重要な点は、邦訳歌詞の現段階が、未だ一応の結論に達していないと考えられる為、学生の研究材料として不適當であると考えて後日の事とし従来声楽部の方針通り原詞使用としたのである。日本語歌詞の歌唱法が、長い間なおざりになつてきた事に大きな不満を持つ私は、こうした企てを通して近い将来新しい歌唱のメソッドを確立する機運を作りたいと願っている。

歌劇の世界の現実を経験し、小さな自分の無力を常に悲しんでいる時、声楽部の教官として、どの教官よりも芸大を愛し、芸大の名誉を考えて熱心に指導下さつたルツチ氏に対して、私は限りない感謝と尊敬の意を、更めて此の紙上を借りてお伝えしたい。又前記演出の栗山氏、美術の北川氏と共に無理な予算をやりくりしてどうにか幕の開く迄に御骨折下さつた舞台監督長沼氏に深く感謝致します。

本公演を通して学生諸君が、私達の時代の5年分、いや、10年分も勉強してくれるものと思つている。私達はそれ程牛の歩みを歩んだのである。

どうぞ此の尊い経験を歌詞の面のみならず、社会に家庭に広く実践され、より高い生活を礎かれるように切に願つている真剣な気持が理解されれば望外の喜びである。



「スタッフ一同の猛練習及び立稽古—於東京芸大—」

ヴェルディー—Verdi— 椿 姫 La Traviata
F・M・ピアージェエの原詞による 全4幕

演出・指揮 ニコラ・ルツチ
(Nicola Rucci)

合唱指揮 柴田陸陸 演出助手 栗山昌良 舞台監督 長沼廣光
伊藤栄一 舞台美術 北川 勇 舞踊振付 真木竜子
照 明 石井尚郎 衣 裳 佐藤志都子

演 唱 芸大音楽学部声楽科四年
合 唱 芸大音楽学部声楽科三年
管 絃 楽 芸大音楽学部学生管絃楽団

配 役

ヴィオレッタ (Violetta Valery)

弓削睦子・足立裕子・大里洋子
関 萌子・吉田恭子・大山慶子
野呂妙子 (交替出演)

フローラ (Flora Bervoix)	高橋和子・岩田久貴子 (交替出演)
アンニーナ (Annina)	村瀬純子
アルフレッド (Alfredo Germont)	五十嵐喜芳・沢田文彦 (交替出演)
ガストン (Gaston)	石井義信
ジェルモン (Giorgio Germont)	栗林義信・長坂 典・三宅忠義 (交替出演)
男 爵 (Baron Douphol)	梅原秀次郎
オビニイ侯爵 (Marquis D'Obigny)	三輪十次
医師グランヴィル (Doctor Grenvil)	金慶植
ヨゼフ (Giuseppe)	小野沢徳一
布地提供・東邦レーヨン	



ニコラ・ルッチ

オペラ 清潔な歌いぶり「椿姫」 第一回芸大オペラ公演

◇東京芸術大学音楽学部学生による初のオペラ公演「椿姫」が上演された。来会の藤原義江氏が「十六年前を思うと感慨無量」とつぶやいていたが、在学中の笹田和子だったかを出演させようとして当時の故乗杉校長から「上野の生徒に白粉はつけさせぬ」と一しゅうされたことを思い出したのだらう。その芸大が独唱(四年生)合唱(三年生)管弦楽団、おまけにバレエ(らしきもの)まで全部学生の手によってオペラを上演したのである。◇オペラをやりたいという声は一部の教授の間にもあったが、むしろ学生の間からもりあがったものらしく、それだけに意気込みも大変なもので、一年以上の練習を重ねたという。その意気と、練習量と指揮者ニコラ・ル

ッチ以下教授連の適切な指導がものをいって、公演の出来栄えは学芸会あるいはおさらい会の域をはるかに抜いた立派なものとなった。会の性質上主役のヴィオレッタは七人、アルフレッド二人が交代に二日間の各幕の舞台をつとめ、その他もできるだけ平等にみんなを歌わせるように配慮されていた。その出演者がみな清潔な歌いぶりであったのは当然として演技も想像以上に達者だったのは驚かされた。

◇初日の出演者のなかでは第二幕のヴィオレッタ大山慶子とアルフレッド(第二幕第一場を除く)の五十嵐喜芳が出色。そしてまた管弦楽団の充実した演奏も賞したい。第二幕第二場のパレーまで速成で習ったらしい学生がやった。熱意は買うがここだけはどうみても学芸会におちた。

◇芸大がオペラをやるのは、オペラが盛んになった時代の反映ではあろうが、いままでも必要を痛感しながらふみ切れなかったのである。それだけにこの「椿姫」公演は大きな意義をもっており、さらに芸大音楽学部が職業学校ではなく、音楽芸術家を育てる場所へと歩みをむけ始めた芽のようにも感じられた。=十八、九日、日比谷公会堂(伊奈一男)

〔原資料縦組〕

(『毎日新聞〔夕刊〕』昭和31年4月19日)

オペラ評 「椿姫」予想以上の出来 芸大のオペラ初公演

東京芸術大学の初めてのオペラ公演が行われた。日本の音楽学校にオペラ教育がなかったことは、声楽にリードとオペラがある以上、長い間問題になっていたことだが、これがやっと実現したのである。学校はほとんど一年近く、総がかりでいろいろ犠牲を払い、力を入れて準備を進めてきたという。

結果は、指揮者ニコラ・ルッチの音楽から演技まで全部にわたっての熱心な指導で、予期以上の成功を収めたといえよう。出演の学生たちは主役も合唱も管弦楽も踊り手までみんな最善をつくして、清潔で、しかもかなり整った音楽と舞台をつくりあげていた。そしてアルフレッドの五十嵐喜芳が歌でも仕草でも他の人たちにくらべ一日の長があつて支柱になってい

たことも見逃せなかった。

ヴィオレッタは各幕ごとに交代で、吉田恭子、大山慶子、大里洋子、関萌子の順で出た。少々子供っぽい点があったが、椿姫役はみんな心得たもので、よくやっていた。四幕を通じては、終幕で五十嵐と関の芝居が、管弦楽とともに幕切れの大事なしめくりを果していた。ほかにアルフレッド(第二幕だけ)沢田文彦、ジェルモン長坂典、三宅忠義。

装置は簡単で粗末であったが、学校のオペラでは、これ以上立派にする必要はないと思った。(呂)

—18日・日比谷公会堂。次回19日はヴィオレッタ弓削睦子、足立裕子、野呂妙子が出演。

[原資料縦組]

(『朝日新聞』昭和31年4月19日)

第2回

東京芸術大学音楽学部第2回歌劇公演

[1957年] 4月27日5時・28日1時・5時 神田 共立講堂

主催 東京芸術大学音楽学部後援会

芸大のオペラの研究発表に就て 音楽学部長 下 総 皖 一

声楽家を主体として演奏されるとはいえ、オペラは、文学・美術・舞踊・音楽等の総合芸術であつて、その構成は実に非常に広大なものとなるのである。従つて、その一回の上演にも、長い間の訓練と、莫大な費用を必要とするものである。

本学には、まだ正式に予算其他の裏付がないため、わが「芸大オペラ」は、本当の意味の誕生をしたとはいえないが、ビデオ・ホールの絶大な御力添えにより、本学音楽学部後援会主催のもとに、昨年第一回の研究発表を行い、続いて今回第二回の研究発表をすることになった。この発表には、長い間の熱心な教官各位の指導は勿論、学生諸君の涙ぐましい一致団結の力がこめられているのである。

われわれはなお将来に向つて、本学に於けるオペラの専門的研究機関の

設置と、わが国に於けるオペラの発展のために、できるだけ努力をいたしたいと念願するものである。(昭和32. 4. 9)

* オペラクラスに就て

金子 登

プロトウ曲 マ ル タ 全四幕

伊藤武雄訳詞

指揮	金子 登	舞台美術	北川 勇
演出	下村 節子	照明	滝尾 輝雄
合唱指揮	渡辺 高之助	舞台監督	長沼 廣光

伊藤 栄 一

演 唱 芸大音楽学部 声楽科 歌劇専攻 31年度卒業生

合 唱 芸大音楽学部 声楽科 歌劇専攻 四年 生

管 弦 楽 芸大音楽学部 学 生 管 弦 楽 団

配 役

レ デ イ 徳江陽子・久城千恵子・新木とみ子
(マルタ) (交替出演)

ナ ン シ ー 本橋美子・太田宏子・小山洋子
(ジュリア) 藤井多恵子 (交替出演)

ライオネル 田巻敏明・伊藤富次郎・河原地近思
村上義昭 (交替出演)

プランケット 笠井幹男・岩森栄助・田島秀男
竹之内敏夫 (交替出演)

トリスタン 池上恵三・平井勝二 (交替出演)

リヒター 揚 超

布地提供・東邦レーヨン

* 若い世代に期待する

下村 節子

第二回芸大オペラ誕生記

インスペクター 村上 義 昭

第一回芸大オペラ「椿姫」が成功裡に幕を閉じたので、第二回オペラのオーディションもクラスの大多数がそれに応じた。ルツチ教官の下、チレアの「アルルの女」（本邦未演）を原語上演の予定で、早速四月から取組んだのであるが、音楽的にも殆んど充実を来していた十月、ルツチ教官突然の御帰国で、私達の受けた衝撃は非常に大きなものがあつた。こゝで挫折すれば芸大オペラは消失の形になるし、何とかスランプを乗切るべく、プロデューサー格の柴田教官は大童だつた。幸にしてたまたま金子教官がウイーンから久々に帰朝されたし、上演曲も自他最もふさわしいと思われる「マルタ」に決定されたのであるが、本格的な練習を始めることができたのは、暮も迫る十二月に入ってからであつた。昨年度はすでに十月ソリストの立稽古も殆ど完成されていたのに、私達の演技は全く一年生、歌詞も原詞のドイツ語で演れなくもないが、絶対に短い練習期間のため、伊藤氏の日本語に決め、卒業試験も目前に控える冬休みも返上しての猛練習振りであつた。しかし出演者が多いのでどうしても能率が上らない。そこで幕毎にキャストを交代させるという苦肉の策を講じスタッフの負担も4分の1で済む様にしたのである。二月半ばに入つて、ようやく在学中のすべての試験が終り、専心出来ると思つたが、肝心の会場と上演日程が決らない。日比谷、青年館、産経とたらい廻しの末、結局共立と決定し、精神的にも安定を見て、立稽古もどうやら軌道に乗り始め、春休中はもちろん、入試期間の登校禁止の際も、外部を借用して研鑽を重ねたのである。コーラスやオケも休みを割いて登校したが、中でも今日迄の金子、河内（下村）教官の時間的にも熱心な御指導と、柴田教官の蔭の力にはたゞ頭を下げる外はない。こういう団体行動には、個人的な意志や感情が犠牲にされるのが常であつて、私は常に、各人の調整をいかにするかということで、インスペクターとして、最も辛い立場に置かれていた。しかし全員協力の下、あらゆる障害を乗り越えて、この運びに至つたことは、顧みて特に感慨無量の思いがする。

四月は就職した卒業生にとって更に多忙を極めたが、皆先方の理解もあ

つて、安心して専念できたことに厚く感謝したい。第二回芸大オペラは、以上のように決して安産とは言えないかも知れないが、喜ばしきこの二度目の誕生に當つて、皆様の絶大なる御声援をお願い致したく、又いろいろ御世話戴いた外部の方々には、こゝに紙上をもつて深く感謝の意を捧げる次第である。

（昭和32. 4）

第二回発表公演に當りて

柴 田 陸 陸

N・ルツチ氏の突然の帰国で、第二回の研究曲目はフロトウの「マルタ」と決定されました。学部の教材として採用する以上当然原語（独乙語）にすべきであるとの考えもありましたが、卒業迄の期間が少なくなつていること、演技を伴う演奏に対する指導に担当者として自信のなかつた点、それに或時期に、学生の日本語演奏に関する諸データを得たいという希望もありました。幸い伊藤武雄氏の訳詞が、初演時大変好評で教材として使用するにも適している為、試みとして訳詞を採用することになりました。

専攻制度が確立されていない為、自由選択の学生は荷が重く、又、必ずしも出演の学生がオペラに適している者ばかりでもなし、声楽成績の順位で出演者を決定したものでもありません。

声楽部の目的が優秀な声楽家の養成が主目的である以上当然時代に活躍し得る歌劇歌手の養成も負わなければならない責任であります。而し又、同時に定員の許す限りに於て受講希望者は歌劇の實際がどのようなものであるかを其の最初から発表の段階に至る迄、あらゆる面に亘つて知らせることも重要なことでもあります。卒業して歌劇歌手として活躍し得る者は選ばれた人達です。何人かの人達は、ただちに教職に就く者もありますが、専門的に活躍する人達は申すに及ばず、たとえ教職につく者も、或は音楽から離れる者も歌劇専攻のコースを通つたことが、どれだけ意義のあることであつたかを知らせることが、最大の務めであると考えています。〔後略〕

（昭和32. 4. 19）

第3回

東京芸術大学音楽学部第3回歌劇卒業発表

[1958年] 3月27日6時 日比谷公会堂・3月28日6時 九段会館ホール

主催 東京芸術大学音楽学部後援会

- | | |
|-----------------|------------------------|
| * フィガロの結婚について | 金子 登 |
| * 将来の活躍を大いに期待して | 長沼 廣光 |
| * 第三回芸大オペラ誕生記 | インスペクター 石崎 宏男
村島 丞治 |
| * 寸 感 | 柴田 陸 陸 |

モーツァルト曲 フィガロの結婚 全四幕 (原語演奏)

指揮	金子 登	合唱指揮	伊藤 亘行
演出	柴田 陸 陸	舞台美術	北川 勇
	長沼 廣光	照明	滝尾 輝雄
舞台監督	富長 泰夫	衣裳	佐藤 志都子
		振付	島田 廣
演 唱	芸大音楽学部 声楽科 歌劇専攻 32年度卒業生		
合 唱	芸大音楽学部 声楽科 歌劇専攻 四年 生		
管 弦 楽	芸大音楽学部 学 生 管 弦 楽 団		
パレ ー	服部・島田 パレ ー 団		

配 役

	27日(夜)	28日(夜)
伯 爵	栗林 義信	高沢 良明
伯爵夫人	二関 洋子	関根 滋子
フィガロ	池上 恵三	石崎 宏男
スザンナ	加藤 綾子	大庭 邦子

ケルビーノ	太田 宏子	浅野 久子
マルチエリーナ	小山 洋子	梶原美年子
バルトロ	村島 丞治	村島 丞治
バジリオ	伊藤 富治郎	中村 雄
クルチヨ	伊津野 修	伊津野 修
アントニオ	小野木 教恵	小野木 教恵
バルバリーナ	西 八重子	西 八重子

プレリュード
前奏曲(2) 晴れの卒業公演に「フィガロの結婚」

準備すすむ芸大オペラ

卒業のシーズンがきた。ことしも芸術大学からたくさんの学生が、かがやかしい音楽家への道をめざして巣立ってゆく。だれしも希望にみちていることだろうが、なかでも声楽科の学生はしあわせだ。オペラの卒業公演という晴れの舞台がひかえているからである。

その「芸大オペラ」も今年で三回目を迎える。一昨年「椿姫」続いて「マルタ」そしてことしはモーツァルトの「フィガロの結婚」と取り組んでいる。練習も九分どおり仕上がって、二十七日(日比谷公会堂)二十八日(九段会館)の公演を待っているところだ。

過去の実績がモノをいって、なんだ学生オペラか、と軽視する人はなくなつた。いままでは総花式に出すため、各幕ごとに主役が入れかわったりしたが今年はそのもやめて一人が全幕をとおす。出演者のなかにも、つい先日藤原歌劇団の「トスカ」で堂々とスカルピアを歌つてのけ、好評をあげたバリトン栗林義信氏(専攻科卒業)も加わっており、なかなか堂々たる顔ぶれである。

学生たちは、オペラのけいこが楽しくてしょうがないらしい。演出を担当している俳優座の長沼廣光氏にきいてみても「みんな白紙だから、こちらの意図のとおり動いてくれる」といっており、学生たちも「オペラの演技を系統だてて教えてもらえる貴重な機会」と自覚している。

四年生にとってはこのオペラに出ることが「重唱」の単位になってお

り、また専攻科を出る人は「オペラ」の単位となる。“出ればよい”のであって、結果は問われないのだそうだが、将来のオペラ歌手をめざす人にとっては、結果は問わぬどころではない。楽し気なふんいきではあるが、一人々々の表情には真剣さがあふれている。

〔原資料縦組〕

〔『毎日新聞〔夕刊〕』昭和33年3月12日〕

第4回

芸大オペラ公演

モーツァルト曲

コシ・ファン・トゥッテ 全二幕

一女はみんなこうしたもの一

原 語

指 揮 山 田 和 男
 演 出 長 沼 廣 光
 装 置 古 賀 宏 一
 照 明 滝 尾 輝 雄
 舞台監督 塩 見 哲
 合唱指導 須 賀 靖 元

出 演 東京芸術大学音楽学部声楽科（オペラ専攻生）
 合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽科（三年生）
 管絃楽 東京芸術大学音楽学部学生管絃楽団

1959年2月2日(月)・3日(火) 午後6時開演

於 神宮外苑日本青年館

主 催 東京芸術大学音楽学部後援会
 後 援 毎 日 新 聞 社

配 役

	2日第1幕	2日第2幕	3日第1幕	3日第2幕
フィオルディリージ	関根 滋子	関根 滋子	東 敦子	永 山 馨
ド ラ ベ ラ	浅野 久子	尾城 光子	荘 智世恵	佐藤 暉子
グ ス ピ ー ナ	加藤 綾子	松村 伸子	中川美弥子	松村恵美子
フ ェ ラ ン ド	金谷 良三	金谷 良三	島崎 文男	水野 俊彦
グ リ エ ル モ	池田 明良	池田 明良	高田 彬生	高田 彬生
ア ル フ ォ ン ズ	築地 文夫	中島 陽一	築地 文夫	埜 上 定

上演に寄せて

柴田教官の後を引継いで、いよいよ芸大オペラも第四回を迎えました。昨年の「フィガロの結婚」について、アンサンブルの多いものと云う意味で「コシ・ファン・トゥッテ」と、今年もモーツァルトのものを選んでみました。やはりモーツァルトのオペラは、歌唱の基本的な技術を演技と共に学ぶのに適しているようです。

ない予算の中から、公演迄に漕ぎつける事はなかなか大変ですが、凡ては音楽への情熱が種々の困難を克服する事と信じています。この公演に当って、利益を度外視して協力して下さった山田、長沼両教官を始めスタッフの方々、オーケストラ関係の教官、又学生諸君に対して心より感謝を捧げます。

又個人的に私達を快く援けて下さった河合滋氏の友情に対しては、御礼の言葉もありません。加えて今回より芸大オペラ公演に対し後援を快諾された毎日新聞社にも紙上を借りて御礼を申し上げます。ただ無事にこれからも、芸大オペラが育って行く様に、そればかりを祈りながら――

畑 中 良 輔 (オペラ・クラス
 担当教官)

*私は思う

山 田 和 男

第四回公演に際し

長 沼 廣 光

最近、国内でオペラが盛んになり、一昔前のコスチュームをつけたコンサートの様を出て、歌唱と演技の両者を要求される様になってきました。それにともない、大学オペラも年々盛んになり、芸大、武蔵野、国立、三大学でも定期公演を持つようになりました。大変喜ばしい事だと思います。しかしここで考えなければならないのは、その公演だけの稽古では意味がないと云う事なのです。と云うのは、日常訓練、歌劇演技の基礎、内容的歌唱の問題等、オペラシンガーとしてやらねばならぬ事が多々有る訳です。これらの基礎をみっちり勉強したオペラシンガーが演じてこそ、はじめて今迄の紋切型のオペラのカラを破る事が出来るのではないかと思います。

昨年四月、歌劇理論の授業が開講されて、初の公演を迎える事になりました。その授業も九月で了え、オペラオーディションに通った諸君をお預りして十一月迄、音楽練習、十二月より本格的稽古に入りました。毎年の事ながら稽古に入って先づ私がやらねばならぬ事と言ったら、諸君がやゝもすれば棒立ちになり勝ちな姿勢の矯正、歩き方等からはじめねばならない事です。実に時間のかかる稽古です。でもその度毎に叱ったり、なだめたりしてきましたが、そう云う時、私が一番感じる事は、諸君に怨がなさずぎるといふ事なのです。演出家がこゝではこうするんですよ、そしてここでは立つんですよと手取り足取り教えて呉れる迄待っている状態では、自然な演技など有り得ないし、気持ちがそこまでいってない為に内容的歌唱すら出来ません。それでは演出は愚か、唯単なる演技指導に終わってしまい、過去の紋切型を踏襲する結果になってしまいます。

今回の公演で諸君はオペラとはこういうものだという糸口だけはつかんでくれたと思います。しかしこれからが大変です。この公演を機に諸君が日常訓練等、研究の機会を持たれる事を心から願っております。食欲に！私も微力ながらお手伝いするつもりです。

最後に、恩師、故青山杉作先生が一九五四年に残されたこのオペラの名演出を奇しくも今日、私が演出する事になり、難かしさを痛感すると同時に、先生の歌劇界に残された偉大な功績を今更ながら思わずにはいられま

せん。この上は、先生の残された足跡を汚す事なく、その万分の一でも近づけたらと努力するつもりであります。

(1959. 1. 16)

第5回

芸大オペラ研究発表

歌 劇 モーツァルト作曲 全二幕（原語演奏）

魔 笛

指 揮 金 子 登

演 出 長 沼 廣 光

装 置 古 賀 宏 一

照 明 滝 尾 輝 雄

出 演 東京芸術大学音楽学部声楽科（オペラ専攻生）

合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽科（三年生）

管絃楽 東京芸術大学音楽学部学生管絃楽部

1959年10月1日(木)・2日(金)・3日(土)午後6時開演

於 神宮外苑 日本青年館

主 催 東京芸術大学音楽学部後援会

御 挨拶

芸大のオペラの公演も今回で5回目になりました。

音楽の隆昌とともに、オペラの研究、試演が各方面で、これまでにたく熱意をもって行われていますことは喜ばしいことです。

芸大でも、ここ数年来これに手をつけてきましたが、ただ、われわれは、研究的に、なるべく正しい音楽にそって行かねばならぬというような方針でやっていますので、未熟であることは余儀ないことといたしまして、ここかしこには或は掬すべきものもできるかと期待している次第で

ざいます。

何卒御高聴下さいますようお願い上げます。

音楽学部長 田 尾 一 一

*「魔笛」上演に寄せて

オペラ担当教官 畑 中 良 輔

*私は思う

金 子 登

*第五回公演に際して

長 沼 廣 光

配 役

	1日(夜)	2日(夜)	3日(夜)	
ザラストロ	田辺 桂一	山本 皖 惟	新保 堯 司	
タミーノ	金谷 良三	塩野 勇 記	大槻 秀 元	
弁 者	五条 朝男	五条 朝男	五条 朝男	
第1の} 僧 侶	渡辺 恭夫 堺 本 功	山 村 弘 三 好 恒 明	渡辺 恭夫 堺 本 功	
第2の}				
夜の女王	窪田 江美子	赤 沢 和 子	井 崎 彰 子	
パミーナ(その娘)	佐藤 暉子	荒 井 良 子	三 翫 晶 子	
夜の女王の} 侍 女	東 敦 子 莊 智世恵 成田 絵智子	川 本 伸 子 鈴 木 英 子 玉 真 久 子	村島 寿深子 新谷 紀伊子 吉 見 康 子	
				第1の}
				第2の}
パパゲーノ	原田 茂生	大川 宗 男	塩 沢 孝 通	
パパゲーナ	加藤 綾子	花 田 夏 枝	加藤 綾子	
モノスタトス	渡部 幸世	佐藤 幹 一	渡部 幸世	
第1の} 童 子	金光 良美 小泉 節子 加藤 幸子	堀内 礼子 蝦 名 雅 美 渡辺 久仁子	土 岐 瑞 枝 田 中 万 美 子 佐 藤 澄 子	
				第2の}
				第3の}

第6回

芸大オペラ研究発表

歌 劇 モーツァルト作曲 全四幕(原語演奏)

フィガロの結婚

指 揮 山 田 和 男(夏精)

演 出 長 沼 廣 光

装 置 古 賀 宏 一

照 明 秋 本 道 男

舞台監督 柚 木 脇 治

演出助手 林 正喜・笠井幹男

声楽指導 渡 辺 高 之 助

副 指 揮 遠 藤 雅 古

合唱指揮 同

出 演 東京芸術大学音楽学部声楽科オペラ専攻生

合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽科3年生

バレエ 服部・島田バレエ団

管弦楽 東京芸術大学音楽学部学生管弦楽部

1960年10月5日(水)・10月6日(木)・10月7日(金)午後6時開演

於 神宮外苑 日本青年館

主 催 東京芸術大学音楽学部後援会

オペラ上演に当り

芸大オペラも第6回公演を迎え、モーツァルトの「フィガロの結婚」を発表することになりました。

モーツァルトの作品は、声楽、器楽を問わず之を正しく演奏することは、極めて至難の業で、洋の東西を問わず最高技術として、最終目標の一つでもあります。

芸大がそのオペラの課題としてモーツァルトを取り上げていることは、あらゆる声楽的要素を身につけると云う意味で誠に当を得ていると思えます。学生時代にオケ伴奏で衣装をつけてステージでオペラをやったという

ことは、オペラに関心を持つ者の夢でもありましょう。

今、一年がかりで猛勉強した成果を此処に発表されようとしています。アリア、アンサンブルは勿論、セリフも殆んどカットなしで原語でやるというたて前で計画された関係で学生としては非常な負担と努力を必要とします。然し乍ら、モーツアルトのオペラを学生時代に全曲暗譜して自分のレパートリーの一頁に加えられることの出来る喜びは、その苦勞を補って余りあると思います。勿論大成功することに越した事はありますが、殆んど生れて始めて実際にオペラをやる者が大部分です。至らない所が多々あると思いますが、それは、それとして来年への、又各人は明日への試金石として乏しい現在に対する燈火とし度いと思います。

芸大オペラの成長は、これをやる学生の燃える様な情熱と之を指導する学校当局の熱意と聴衆の方々の温い御声援とが必要です。

どうか此の意とする所をお汲み取り下さいまして此の発表を温く見守って頂き度いと思います。終りに、いつに変わらぬ御援助を下さった毎日新聞社事業部と河合楽器の河合滋氏に対し厚く御礼申し上げます。

オペラ担当教官 渡辺高之助

私は思う

山田和男

第6回目の公演ともなるとスタッフ諸君には今までのような不安定な空気が全くない。

初め頃は、オペラ公演そのものが、白い眼で見られたし、本人たちも居候のような居心地だったが、大学当局の充分な御理解とともに、もはや大手を振ってオペラを歌えるようになった。先輩が5回もやりおさせたという潜在観念もあって年とともに腹のすわったノビノビとしたしかも熱のこもった練習期間であった。

「ノビノビとしたどころか心配で不安で……」——配役諸君はいう。もったもな話だ。オペラを勉強し出してから、一年にもならないからだ。しかも個人のレッスン教室では今までやらなかったこと許りだ。いわく「チーム・ワークの問題」「演技の諸問題」「音楽と演技の相關々係」「オーケス

トラの伴奏で歌うこと」「演出上の推敲」——そうした点ではホンの小学生一年だった。だから長沼廣光氏に「コラア」とか「コラこの野郎」と何百回かどなられるし、私には「地だんだ踏まれた上にオケも止まる。その上に睨みつけられる」——しかし諸君は大へん勉強家だった。ガラス玉だったのが今はダイヤモンドらしく思えるようになったからだ。笑いごとではない。

☆

☆

この仕事も人間完成とともに成熟してゆくもの。この一ケ年の結果がどのような成果を示すかはソウ重大事ではないとは言え、この芸大のオペラ科のように親切な基礎指導と執拗なほどに贅沢な練習は外では絶対にないということだ。この一ケ年の基礎かため程貴重な質の時間は一生に又とない瞬間だったことは先々に行つてわかるだろう。どうかこの年で吸収したものを貪欲にいつまでも反芻し、ますます自身の中に発展させていって欲しいと切に思う。

一方私はこうした実のある研究方法を芸大の大きな誇りとも考えるのである。

☆

☆

さて小学一年生などと言われても、まさかと思われるほどに、立派な立ち振る舞いを感じさせてくれる今回の才能ある君たち——ほこりを以てこの公演を立派なものにしよう。
(1960・10月)

* 第六回公演に際して

長沼廣光

配 役

	5 日	6 日	7 日
伯 爵	平野忠彦	松本耕次郎	原田茂生
伯 爵 夫 人	村島寿深子	野村トシ子	三 薺 晶 子
フ イ ガ ロ	秦 邦 明	塩 沢 孝 通	大 川 宗 男
ス ザ ン ナ	酒井美津子	荒 井 良 子	赤 沢 和 子

ケルビーノ	岩本 嘉代子	遠藤 真知	釈 信子
マルチェリーナ	田中 道子	平岡 敏子	半田 美智子
バルトロ	新保 堯司	丹羽 勝彦	新保 堯司
バルバリーナ	小田 恭子	加藤 敬子	山口 慶子
アントニオ	宍倉 正信	城間 繁	宍倉 正信
バジリオ	下野 昇	五十嵐 悟	帆足 琢也
クルツィオ	佐橋 実俊	佐橋 実俊	佐橋 実俊

第7回

オペラ研究発表

モーツァルト作曲 全二幕 (原語演奏)

コシ・ファン・トゥッテ

—女はみんなこうしたもの—

指揮 ヤン・ポッパー
 演出 長 沼 廣 光
 装置 古 賀 宏 一
 照明 秋 本 道 男
 パレエ 服部・島田パレエ団

出演 東京芸術大学音楽学部声楽科オペラ専攻学生
 合唱 東京芸術大学音楽学部声楽科学生
 管弦楽 東京芸術大学音楽学部学生管弦楽部

昭和36年7月4日(火) 5日(水) 6日(木) 午後6時開演
 於 都市センターホール (千代田区平河町)

*御挨拶

ヤン・ポッパー

配 役

	4 日	5 日	6 日
フィオルディリージ	村島 寿深子	三 菊 晶 子	大 崎 幸 子
ド ラ ベ ラ	野村 トシ子	小笠原美智子① 平岡 敏子②	田中 道子
デ ス ピ ー ナ	赤 沢 和 子① 荒 井 良 子②	酒井 美津子	釈 信子① 鈴木 美恵子②
フ エ ラ ン ド	三 林 輝 夫	下 野 昇	板 橋 勝
グ リ エ ル モ	秦 邦 明	塩 沢 孝 通	宍 倉 正 信
アルフォンゾ	大 川 宗 男	平 野 忠 彦	平 野 忠 彦

第8回

芸大オペラ研究発表

ニコライ作曲

「ウィンザーの陽気な女房たち」

全3幕 (日本語演奏)

指揮 金 子 登
 演出 ゲルハルト・ヒュッシュェ
 装置 古 賀 宏 一
 衣裳 河 盛 成 夫
 照明 秋 本 道 男
 振付 真 木 竜 子
 舞台監督 林 正 喜

出演 東京芸術大学音楽学部声楽科オペラ専攻学生
 合唱 東京芸術大学音楽学部声楽科学生
 管弦楽 東京芸術大学音楽学部学生管弦楽部
 パレエ 伊藤道郎舞踊芸術研究所

昭和37年10月4日(木)午後6時・10月5日(金)午後1時・6時開演

都市センターホール（千代田区平河町）

配 役

出演日 役 名	4 日	5日(昼)	5日(夜)
ファルスタッフ	平野 忠彦	平野 忠彦	横田 浩和
フルート氏	蒲地 青史	植木 桂	宍倉 正信
同 夫 人	梅田 寛子	{貴島 百子 丸山 富士江	土屋 可愛
ライヒ氏	高橋 隆蔵	高橋 隆蔵	高橋 隆蔵
同 夫 人	平岡 敏子	石沢 君子	小笠原美智子
娘 アンナ	鈴木 美恵子	林 ひろみ	蔵田 美津子
フエントン	喜多村 彪	{下野 昇進 中井 登	板橋 勝
シュペアリッヒ	帆足 琢也	本 間 登	三林 輝夫
カーユス博士	松西 正秀	松西 正秀	松西 正秀

第9回

芸大オペラ研究発表

プッチーニ作曲

「ラ・ボエーム」

全4幕（原語演奏）

総 監 督 ニコラ・ルッチ
柴 田 陸 陸
指 揮 ニコラ・ルッチ
合唱指揮 畑 中 良 輔
演 出 長 沼 廣 光
声楽指導 佐々木 行 綱
装 置 古 賀 宏 一
照 明 秋 本 道 男

舞台監督 林 正 喜

出 演 東京芸術大学音楽学部声楽科オペラ専攻学生

合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽科学生

管 弦 楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽部

昭和38年10月8日（火）9日（水）10日（木）午後6時開演

都市センターホール（千代田区平河町）

配 役

出演日 役 名	8 日	9 日	10 日
ロドルフォ	板橋 勝	山岸 靖	田原 祥一郎
マルチェロ	平野 忠彦	佐伯 雅巳	植木 桂
ショナール	宍倉 正信	丹羽 勝彦	松西 正秀
コリーネ	高橋 隆蔵	持田 篤	鈴木 義弘
ベノア	横田 浩和	高橋 隆蔵	横田 浩和
アルチンドロ	横田 浩和	高橋 隆蔵	横田 浩和
ミミ	土屋 可愛	梅田 寛子	阿部 容子
ムゼッタ	丸山 富士江	加藤 順子	佐々木 郁子
パルピニョール	河瀬 柳史	河瀬 柳史	河瀬 柳史
あんず売り	秋山 衛	秋山 衛	秋山 衛

第10回

オペラ研究発表

日比谷公会堂

1964—10：21.22 P.M.6：00

東京芸術大学学長 小 塚 新 一 郎

芸術大学音楽学部のオペラ研究発表が、本年をもって第10回になったと

いうことに、種々の感懐を持つものであるが、貴重な体験と内容の充実が諸施設の整備と相俟って、将来の発展を約束するものと存じ、同慶の致りである。現在オペラ講座は、声楽科内の一講座を占めるに至ったが、しかしそれはオペラの一部（声楽・演技・演出）の研究であって、管弦楽を始め、劇場組織を含む膨大な機構の完全な協力と活動によって、始めてオペラの上演が可能になるのであって、全く大変なことであるが、大変なだけに、芸術大学が着手しなければならないことだとも考えるのである。

わが国では、優秀な才能に依って将来を期待される卒業生達に、その真価を発揮し得る劇場も組織も存在していない現状である。この際大学が、何等かの形において、それを代行する準備を持つことも、当然考えられてよいことであろう。その意味に於いて、たとえ5年に一度くらいでも、大学の総力に依って公開し得る内容のオペラを目指してほしいと期待している。或は、それは国立歌劇場の仕事であるかも知れないが、その誕生の日迄を芸術大学で手がけることも、決して不自然ではあるまい。

さて多くの不備を克服して、ヴェルディの最高傑作として、且又難曲の一つとして有名な「ファルスタッフ」を発表に迄こぎつけたことを関係者と共に慶びたい。そして猶、一層の努力をもって、将来の開拓を心がけてほしいと思う。

又御協力下さった部外の方々に、紙上をかりて厚く御礼を申し上げますと共に、今後一層の御支援を、広く音楽愛好の皆様方にも御願する次第である。

東京芸術大学音楽学部長 福井直俊

オペラが他の講座と同じように、音楽学部の重要な講座の一つであることはいままでもないが、当然とは言え、他の講座に比較して相当の懸隔のあることも否定出来ない事実である。学部は近年オペラの開発に着手し、講座の創設にともない、外人教師の招へい、教室及附属設備の拡充等、逐次内容の充実を来しつつあるが、オペラの持つ総合性にかんがみ、関係者の緊密な連繋はもとより、学部全体の授業としての性格を具現したいと考

えている。

今回大学院学生を主体とする研究発表を「ファルスタッフ」(ヴェルディ)に依って開くことになった。これは通算して第10回目になるが誠に喜びに堪えない。

私は此の第10回の発表に当り、特にこの紙上をもって明記したいことは、第1回より数年間の研究発表が、好意的な学外の後援者に依って行われたという事実であり、其の基礎の上に今日が築かれたという点で、前の方々に深甚の謝意を表明する次第である。

オペラ授業が、発表の為の授業であってならないことは、当事者も常に自覚しているところであるが、他の演奏課目と同じく、成果の検討は、正規の方法に依る発表によって始めて正確が期し得られるので、その意味に於いて、オペラの研究発表も其の重要性が痛感されるのである。

「ファルスタッフ」の演奏は、欧米の先進国に於いてさえ難曲の一つに数えられていると聞く。まして経験の無い学生演奏であってみれば、そのつたなさは想像されるどころである。而し、大学オーケストラの積極的な協力と、ルッチ教師を中心とする主任以下のチームワークは、学生の意欲と相俟って、其の目的とするところに向って、充分な熱意と努力が払われているので、大方の温い御批判を期待する次第である。

オペラ講座は声楽学生のものであるが、その研究発表は声楽だけのものではない。独唱部分は、例えば氷山の水面上に浮ぶ部分であって、水中にある大部分の力によって支えられ安定を保っておられるという事実を冷静に考えなければならない。それ故にこそ、独唱者の責任は重く、したがって、選ばれた者としての自覚を常に忘れないでほしいと思う。難曲に取組んで、激しい勉強に堪えて来た学生の努力は、それ自体貴重な体験であり、オペラを知る為の重要な知識である。而し、そこにも又、少くとも10年に亘る先輩達の努力の集積が礎石となって残されていることを強調したい。

此の発表の成果が、少しでも内容的に充実したものであってほしいと期待するが、それ以上に、今日迄の創造の過程についての厳しい反省こそ、

将来の大成に絶対不可欠の精神であることを指摘しておきたい。

終りにこの発表に格別の御支援を下された方々に厚く御礼申上げると共に「芸大オペラ」に御声援下さる聴衆の皆様方に、今後一層の御鞭撻を御願ひする次第です。

* 芸大オペラの生れた頃

加藤 成之

* ごあいさつ

主任教授 柴田 陸 陸

I miei sinceri auguri a llascuola d'avviamento all'opera lirica per i suoi primi dieci anni di vita, Beati quelli che potranno parlare di tradizione quando la scuola medesima avr'a toccato i suoi cento anni.

Nicola Rucci

東京芸術大学音楽学部外国人教師 ニコラ・ルッチ
(第1回, 第9回, 第10回指揮)

During its ten years of existence, Geijutsu Daigaku's Opera Class has made a vital contribution to the development of opera performance in Japan. Its influence extends even to countries outside Japan, and Gei-Dai-trained singers are winning the respect of impresarios, opera directors, and of the general public in Europe and America. The reason for this can easily be explained by a "mathematical" formula:

Good voice and basic intelligence, plus superior training in singing, acting, diction and musicianship, plus an unbending determination and artistic persistence make a fine opera singer.

Gei-Dai should be congratulated on her wisdom of selecting only the best and strongest voices for opera training, and then devoting much attention and guidance to those select few. Good opera performance can not be achieved by mass production, and takes personal attention and the sincere efforts of faculty and students alike.

Now that opera as Geijutsu Daigaku is celebrating its first ten-year jubilee and has proved itself as a vital force in the ever-growing expansion of Tokyo's modern cultural life, we hope for many more decades of successful growth and high artistic standards! Omedeto gozaimasu!

Jan Popper

Director of Opera Workshop and Chairman of
the Music Department

University of California at Los Angeles.

米国カリフォルニア大学音楽学部 音楽部長兼オペラ科主任教授

(フルブライト交換教授) ジャン・ポッパー博士

(第7回演出担当)

Die Begegnung und Zusammenarbeit mit den Lehrern und Studierenden der Geidai, insbesondere der Opernschule ist mir in frischester Erinnerung.

Unvergessen sind mir der Eifer und die echte Begeisterung mit der von allen jede künstlerische Aufgabe angegangen und durchgeführt wurde.

Ich bin sicher, dass auch heute alle Beteiligten wieder ihr Bestes geben werden, wozu ich hiermit meine aufrichtigsten Wünsche übermittele.

Kammersänger Professor Gerhard Hüsich

Ord. Professor an der Hochschule für Musik zu München

国立ミュンヘン大学教授 ゲルハルト・ヒッシェ (第8回演出担当)

座談会 芸大オペラを顧みて

出席者 柴田 陸 陸

渡辺 高之助

畑中 良輔

長沼 廣光

佐々木 行綱

(司会) 宮沢 縦一

宮沢 芸大オペラも今年の「ファルスタッフ」で第10回を迎えることに成った訳です。十年一昔と言いますけれどこの記念的第10回を迎えるに当って、芸大オペラと言うものを最初スタートさせ、今日も芸大オペラ科の主任教授をされている柴田先生を始め、関係者である畑中先生と渡辺先生、長沼先生、佐々木先生皆さんお集りいただいて過去の芸大オペラについて色々お話し合いをしてみたいと思う訳です。大体今は武蔵野も国立もオペラの公演をやるように成って、芸大だけがやっている訳ではないのですけれど、芸大オペラが実現した頃は学校の公演、学生達に依る公演と云う事で非常に画期的だった訳です。しかしその歴史をさかのぼると決してそれまで日本では一つもなかったという訳じゃないんで、そもそも明治36年、つまり1903年、今から60年余り前、芸大の大学生と卒業生、それがケール先生とペリー先生の指導のもとにグルックの「オルフォイス」を奏楽堂で上演した事があるのです。しかしそれは最初にして最後と云う様な形に成ってしまって、それ以後、第1回の芸大オペラ、つまりルッチ先生指揮の「椿姫」の上演まで、東京音楽学校時代、芸大時代を通じて一度もオペラの学校の公演と云うものは無かった訳です。そう云う長い年月、全然オペラの上演が無かった芸大オペラと云うものを上演復活させその原動力と成った柴田先生は色々な点で大変ご苦労があったんじゃないかと思うのです。その辺の所から柴田先生。

柴田 明治36年ですが、その当時とそれから、大正から昭和初期にかけての時代、何故やれなかったかと云う一番大きな原因は、つまり、オペラと云うものが日本では、外国とは、全然質の違った発達の仕方をして来たことにあるんじゃないかと思うんです。昭和30年「椿姫」が学校で発表できるようになったのは、戦後になってオペラの在り方というものが、戦前の在り方と全然又急転回をした。つまり、オペラと云うものが、正しい認識の下に、大学の課程で、取り上げなければならないと云う内側も外側も、状況が完全に熟して来たということが、一番大きな原因だと思っ

宮沢 そりゃ昔はオペラと云うより日本語で歌劇と云っていた。そして

その歌劇と云うのと、少女歌劇も普通の歌劇もオペラも、皆んな一緒にする見方もあったし、更にそれ以前に於ては、何か非常に芸術的なものとは無縁な単なる娯楽的なものと云う様な形で、軽視されていた時代が随分長い間あったと思うんです。

柴田 現にね、私は昭和13年に卒業したんですけれども、14年だったか、15年に、オペラに出る、と誘いを外部から受けました。私そのとき一遍、学校に意向を聞いてみると云って、聞いたんです。そしたらね、いやしくも、お前は学校に残ってる職員の1人じゃないかそれが、お白粉つけて、衣裳着て、あらぬ恰好で舞台の上で、男女抱擁するなどと云うことをやって良いと思うのかって、もの凄いい叱りを受けました。そこでそのことを伝えました。そうしたらもうチラシに私の名前が出てるんです。そのチラシを学校が見てね、いかんと云うのにやったかと云って、凄く怒られた経験があるんです。戦後になってから、木下先生が、その当時声楽主任をやってらしたかどうか知りませんが、率先して、オペラにお出になったのです。そういう180度の大転回それが、日本の音楽界の状況をはっきり物語っていると思うんです。

宮沢 まあ一つの転換期ですね。今、柴田先生がお話しになったけど、事実、その柴田先生の場合は、それで踏み留ったんですけど、笹田和子さんの場合は、学校の方をやめてオペラに出たと云う訳ですね。やはり、彼女も非常に怒られた訳なんじゃないでしょうか？

柴田 確かね、伊藤武雄先生は、昭和15年ですけど、「黒船」にお出になる為には、助教授をお辞めになって、講師になってお出になりました。

宮沢 それは乗杉校長の時代ですね。まあ、その時代のことは、畑中先生なんかも、御存知だと思うんですけど、とにかく評論家の中にも、オペラは芸術じゃない、と云う様なこと云う人なんかもあった訳でね。ま、オペラの記事なんてなかなか、音楽雑誌にも、登場しなかった様なこともある訳なんです。ところが、戦後になると、オペラを抜きにして、ヨーロッパの音楽界は語れないと云う様なことが云われ出したりして今度は、非常

にオペラに対する認識と云うものが改まったし、その上、殊に最近なんか、いろいろな国からオペラが来るもので、増々状況が変わって来たことは、事実ですが、それにしても、今から10年前、芸大の中で、学生によるオペラ公演と云うものを実現させようとしたことについては、随分ご苦労があったんでしょね。オペラ科は始めは研究会で、スタートした訳ですか？

柴田 ええ、確か、昭和26年だったと思います。学内に、附属研究機関として、吹奏楽研究部、オペラ研究部と云うのを、作ったんです。それはその当時、国内に於けるいろんなオペラ公演でも、回を追うごとに優秀なものをやるようになりまして、オペラに対する学生の関心が随分高まったと云う状況を、学校も察したからだと思うんです。その時、私に初代の部長をやれと云われました。私は学校外の、卒業生にまで、案内状を出しましてね。自分が部長になったんで、一生懸命やりたいと思うから御協力願いたいと云って、大先輩から中先輩、小先輩に到るまで、現役として、歌の活動をやっている人に、全部案内を出して集っていただいたことがあるんです。その時にやったのが「ファウストの劫罰」です。

宮沢 部長を命ぜられたと云われましたが、それは学長か、学部長ですか。

柴田 恐らく学部長加藤先生だと思います。その時の「ファウストの劫罰」私未だに記憶にありますのが酒場の男声合唱が実に素晴しかったのです。その時やっぱり芸大は、すごい地力を出し得るんだと云うことを感じたんです。ところが、学内で問題が起きたんです。というのは、学生が一生懸命にやると云うのは良いが、一生懸命やる為に、自分のソロの勉強に時間的にも影響するし、又声をからして、レッスンにならない、と云う様な問題が出て来た。そこで、一応私のやり過ぎという結果になり、私はいさぎよく部長を辞退し、それから声楽主任が研究部長を兼務するという事になったのです。それから何年かたって、30年にルッチ先生が、九州にいらっしやると聞き、是非お呼びしようとする事になったんです。それで先生が、お出でになりすぐにとりかかったのが「椿姫」[。] その時も

う一度、お前、ルッチ先生を助けてやれと云われ再びもどったわけです。しかし学内には予算的措置は何にもない。カリキュラムと時間割の上からも、オペラをやる丈の準備もない。そういう何も無い状態なので私の様なガムシャラな男が必要だと思ったんです。

宮沢 やっぱりオペラに対する情熱を持った者でなければ出来ない。

柴田 しかしその時の声楽部は私のやり方を全面的に支持してくれて、やりいい様にやれた。これが第1回がスムーズに出来、そしてまた今日迄続いた一番大きな原因だと思います。先ず私の仕事は、その時にやる金をどっかから集めることでした。

宮沢 舞台づくり一つ考えたって、金はあることだから……。

柴田 そこで私の知人であったビデオ・ホールの支配人小谷さん、その方を訪ねまして、私、ぶちまけたんです。芸大で今度、こう云うことをやりたい。いま許可が出て学生達は希望に燃えてるんだけど、いかにせん、官立である為、予算措置が全然無い[。]何かやってくれんか？ と。そうしたら、小谷さんが、二つ返事で、あんたの今の話を聞いたら、これは、当然、誰かが、手伝わなければならない責任がある。よしやろうじゃないか、充分なことは出来んけれど、最小限のことを云ってくれ、それ丈の事はやるから、と云ってくれて、小谷さんとやはり支配人をしていた赤岸さんという方が全面的に3カ年の援助を約してくれた。最近、時に会って聞くんですが、その当時の赤字は、そのまま、まだ残ってるそうです。私は今日ある大きな理由は、その方たちの力にあると思うんです。けども、畑中君が担当してからも、河合楽器だったっけ。

畑中 その柴田さんが3回、おやりになって、その後僕に譲られました。その時、ビデオ・ホールに、お伺いしたんだけど、あれは、私と柴田さんとの個人的関係で、やっているのであって、そこまではお引き受け出来ない、と断られたのです。それでも一文も学校から出なくても公演はやらなければならないというんで、浜松へ3回程行って、河合滋社長に直接会って、なんとかならないかと泣きついたんです。すると河合社長は、非常に心やすく、出してくれて、それであと広告取りに1月程、もう

アッチコッチ、廻りましてちょっと辛かったですけれども。

宮沢 河合さんが後援してくれたのは、4回目からですか。

畑中 4回目、5回目です。それから段々実績が出てきたんです。その後は渡辺先生がやられたんです。

宮沢 渡辺先生の担当の時はやはり河合楽器の援助があった訳ですか。

渡辺 畑中先生とも相談して、銀座の河合楽器へ、伺ったんです。でも畑中先生の時と同じで、始めのうちは、畑中先生と個人的な関係で出したんだから、と云われました。でも無理にお願いして、それでは、今年丈は特別に出しましょうと云う訳で、気持ちよく出して下さった訳で、本当に感謝してます。

柴田 7回目の時は？

渡辺 7回目の時は、これはもう、学校の庶務の方々が、今度はこちらで、と云って、事務の方で、全部やってくれた。

畑中 学校で予算が取れる様になったからですよ、ただ収益は国庫へ入るので、オペラで黒字が出て、我々でそれを貯蓄し、次の公演に廻すということは、不可能な訳です。

柴田 1回から3回迄、ビデオの時は、大学で主催しなかったの、収入は、こっちへ入れたけれども結局は赤字だった。

畑中 僕の時は、後援会主催ということで、免税にしてもらおうと思って、かけ合ったが、それは出来ないというから、僕は事務所へ直接行って、良く話し、1枚1枚、この手で切符の判をおしたりしましたよ。

柴田 私は今後、どの様に発達しても、ビデオ・ホール、及び河合楽器の御好意に対して、学校として感謝すべきで、忘れてはいけないと思う。

畑中 やっぱりね、その事が無かったら、実績が出来なかった。

宮沢 実績があったから、予算も段々取れる様になったんで、そういうことは大事ですね。

柴田 ええ、その間、学校としても、幹部の方達がなんとかしたいと思って努力して下さったのですが、官立なんで、右から左という訳にいか

ない。そこでやはり実績を我々の手で造りながら、長期に渡ってチャンスをと、狙っていたわけです。そして、そのうまくいったのが、7回の「コジ・ファン・トゥッテ」の時、その時は、フルブライトの交換教授で、ポッパー先生が、お出でになったし、またはっきりした予算措置が、充分で無い迄も、初めて、生れた訳なんです。

宮沢 ところでさっきお話しになった、オペラ研究部から、こんど、オペラ専攻科が出来る迄の過程は、どういう風なんでしょうか。

柴田 研究部時代は、卒業生が、相当数参加していました。しかし、学校の純粋な授業である以上、卒業生が多数入っては、色々混雑するので、8回目から専攻科の授業とする様になったのです。

長沼 正式には8回でその前は混成だったんです。

柴田 最初は、第1回目の時に立てた案が、学部3、4年を中心として、3年は合唱、4年は、プリンシパルとして、2年間で、一応形を、ととのえるという方針でいったんです。ところが、第2回ルッチ先生が次の曲目を決められたんですが、御母さんの病気で、急に帰国なさる事になったんです。その時仕方がないので、曲目を他のものにして、我々の知っている「マルタ」これはヴァーハーベニツ先生の演出で相当しっかりした形で教わりましたので、これを上演することにしました。しかもドイツ語では間に合わないで、日本語での上演を許してもらったんです。

長沼 その時に始めて、日本人のスタッフ、つまり、柴田先生、金子先生でやられた訳です。そして、演出は第1回、栗山昌良さん。

柴田 第2回は、ヴァーハーベニツ先生の演出助手をしていた下村節子さんに、ヴァーハーベニツ演出の再現ということでお願いしました。長沼先生は、第1回から関係していらして、いろいろお手伝いして下さいました。今日迄第1回から、ずっと続いているのは、長沼先生丈なんです。しかし、私は、4回から7回迄ぬけたが、1回から3回、8回から9回、と担当して本当にこれ迄の苦労が報われたと思うのは、それは学生が、実に熱心なことです。大学を卒業した後、10時から5時迄、1週4日間、ガンガ

ンやっついて、文句一つ云わなかったんです。特に、1回の時は、正規の授業の終わった後で、奏楽堂で、3月公演ですから、寒い最中の練習です。やっている間はいいが、休んでいると、いねむりをしてしまうんです。可哀想に、疲れているんだな、と思っても、風邪をひかせちゃいけないと思って、寝ている奴を、怒鳴りつけてやっていたが、それでも、皆んないやな顔一つしなかった。学生達が、自分のやり度いものを、やれる喜び、それが強く感じられるんです。それを、いい状態でやり良い様にしてやりたいな、と思うのは、先生として、当然の事なので、つまり、学生の熱心さに引きずられたというか、いつわらざる心境ですよ。

宮沢 そのことについて、プロの色々な公演も演出され、又実際学生の公演も演出された、長沼先生におきしますが、芸大オペラの学生たちの演出を担当されて色々と苦心もあったのではないですか。

長沼 色々ありますが……そうですね。先ず第一は予算面ですね。先程も話に出たビデオや河合から戴いた寄附でやる訳ですが当初は、プロの歌劇団の5分の1位でスタートしたんです。こういう予算でやる訳ですからレポーターが決まるのがとても恐かったですね。それでも第1回から4回目迄はNHK、TBS“百万人の音楽”の中継録音料が入ったりして足りない分を補ったりしました。“百万人の音楽”の件では畑中先生は苦労なさってるんです。第二は演技面です。オペラに関心はあるんですが、まさか自分がと思った学生相手ですから、時間がかかります。第1回から昨年“ボエーム”まで配役はすべて、オーディションで決めてた訳ですが、そのオーディションに立会っていると、兎に角、発声の都合での表情、手の位置は出来るが、演技にプラスするものは、皆無に等しい訳です。ですからその癖を取る事から始めるんですからほとんど年がかりでした。第三は、練習時間ですが、正規に授業として練習時間をもらえたのは確か7回目からだだったと思います。それ迄は学生の授業に合わせて時間を組まなきゃならなかったんです。ですから大体5時から9時、時には昼間もやりますが、途中2時間位、学生が授業に出席する為に、こっちが待たなきゃならない事は度々でした。第四は練習場ですが教室を使用するに

しても正規の授業ではなかった為に空いてる教室を探して机を片付けたりして、それでも部屋が借りられなくて時にはお茶の水分教場に行った事もあります。ですから7回目の時に、あのピンポン室を教室として改造してくださった時はもう嬉しくて嬉しくて兎に角、放浪しないですむんですから。

宮沢 つまり練習室から工面していかなければならなかったんですね？そして今の形になり始めたのは。

長沼 当初はそういう苦労がほとんどです。それが4回目位からぼつぼつ軌道に乗り始め、ポッパー先生来日を機にようやく路線に乗った訳です。授業も研究公演だけでなく外国の大学でも盛んにやられてるハイライトを勉強しようと言う事になり、ポッパー先生が音楽を、それも先生と1対1のレッスンとアンサンブルのレッスンとに別れてまして、先生が音楽を見てる時は、私は演技の授業をしてる訳です。兎に角、先生が1年しか滞日されないんだから我々は出来る丈、吸収しようと、皆んな貪欲でした。そして出来上ったハイライトをミーティングで発表して討議する訳です。そして皆んなが納得したものを毎週、昼休みに奏楽堂で発表してつのが今日の形に発展してつたんです。

宮沢 そうですか。芸大オペラをこれ迄観て感じたことは、始めは“椿姫”の頃なんかぎこちない点がいろいろあったが、段々学生の動きでもなんでも、板について来たと云うこと、これは外国のオペラに影響されたこともあるんだろうし、いろいろ理由もあるんでしょうが最近の学生たちが達者というほどでなくとも非常に芝居らしさが出来たということを感じますね。

佐々木 それはオペラの基礎授業が学部3年からやられる様になった事にもあると思うんです。3年4年と基礎をやって、それから始めてオペラに取り組む訳ですからね。

宮沢 プロのオペラの中には、ともするとなげやりのものがあるし、間に合せがある。もちろん芸大オペラにしても舞台造りの上で、経済的その他でやりくりはありますが、そういうことでなく、音楽的面で、又動き

の点でも非常にまとまってると思うんです。これはきっちり時間をとって非常に熱心な指導と学生の自発的情熱、熱意があつてたっぷり時間をかけてやったからだと思うんです。今、佐々木先生のお話にもあつたカリキュラムの上で、前よりもしっかりした形になった。その事に就てお話し下さい。

柴田 最初は3年で始めまして、次に4年でやるという形をとったんですが、やはりカリキュラムの上で学生の負担が大変だと云うことで、専攻科でやるようになり、4年は基礎と合唱をやるようになって、それが大分長い間続きました。それが更に一昨年から3年で基礎、4年で実習、合唱、大学院で更に実習が多くなり、研究公演をやるというふうになったんです。

宮沢 上演記録をこうして見ると随分大勢出てますね。現在活躍してる人も沢山いますね。で佐々木先生、貴方はプロのオペラで若手を指導して居られて、芸大のようなところで勉強した人と、全然基礎のない人たちを比べると、実際の舞台上に立った場合、やはりしたごしらえのあることがプラスしてると思うんですが？

佐々木 そうですね。私も、学校を出るまでただ歌うことだけだったので、初めて舞台上に立った時などは、“ハイ、右手をあげて” “三歩、歩いて” なんていちいち演出家に云われたものです。オーケストラで唱うこともなかった訳ですが今の学生がこうやって演技をやり、一本のオペラで役をもらい、オーケストラで舞台上ってと、こういうことが社会に出る前に勉強出来るということは本当に幸せな事だと思います。

宮沢 そうですね。ところで、柴田、畑中両先生、ヨーロッパ、アメリカ等で、向うの学校の授業を見て来られた訳ですが、芸大と比較して如何ですか？

畑中 私は、ウィーンのアカデミー中心だったんですが、それと比べて今の大学院の授業の方がシステムティックで、合理的である面が多いと思います。唯、雰囲気だとか、演技上の面で差異はあると思いますが、機構という問題では、芸大はしっかりしたカリキュラムに基いてるし、環境、

設備の面でも、優れていると思います。

宮沢 柴田先生、如何です。

柴田 そうですね。ミュンヘン大学でも今日は、ここ、明日はここと大きい部屋を借りて歩いてるし、アメリカでもやはり講堂、ホールと移動している。だから、機構設備が整ってることでは、芸大が一番だと思います。

佐々木 間口16米、奥行10米、本当に立派な練習室です。

長沼 ボードライト3列、スポットライト10数台、緞帳1枚、袖、一文字幕各3組、 Horizont幕1枚、衣裳約50余点、小道具50余点、二重、箱うま20点、附属設備として教官室、男女学生のメイクアップ・ルーム、小道具、衣裳室、それに教室の正面は総鏡張りで自分の演技を見られる、こういう教室はアメリカでもないですね。

柴田 設備もそうですが時間的にも更に充実を計りたいと思ってます。現在吾々が頂いてる時間は多く、これを更に充実するとなると人手が足りないことがあり、特にコルペティールの面では現在養成中ですが、なかなか人は少いですね。演出の先生も外国から呼んで下さると云うことなので期待してます。

宮沢 私のぞいた学校は、外にオペラハウスがあり、絶えず学校との交流がなされてるんですね。

柴田 この事に就ては学長先生も「日本の様に国立歌劇場のない国では、国立の学校がそれらを完備するというのが大学の責任ではないだろうか」とおっしゃってましたが、私はやはり、国立劇場の建物が出来るのは10年先、20年先かわかりませんが、これだけの素材をそろえてる大学が10年の基礎の上に内容を充実させ、国がオペラハウスを建てる時、そのままそっくり、中味は御安心下さいという様な態勢を作ってゆきたいと思ってます。大学院を卒業したら本格的な活動がここで出来るようにしたい。

宮沢 つまり国立オペラが出来た時にすぐそこに行って活躍出来る様な優秀な人材を育てて行くという態勢が着々と実現し、又、その方向に向ってると、オペラ科を卒業した人達が本業で生活出来る環境を作っていく

という結論ですね。

柴田 私の夢です。

宮沢 それは今席の皆様の責務じゃないんですか。

柴田 それは私達の時代で出来るとは思わないですが、国がその様にオペラが出来るような状態を作ってくれた時、人がいない力が足りないということでは駄目で、そういうときにはいつでも応じられる態勢にしてゆきたい。我々の定年までに若し出来るようなことがあればこんな嬉しいことはありませんがネ。これらの事は、単に個人的な空まわりでなく、大学をバックに私共がやれるということは担当者一同、大変うれしいことで、昔を想うとまるで夢の様です。

宮沢 その様な環境になるまで、今夕おみえになった聴衆の皆様方、オペラの好きな方々ばかりだと思いますが、御後援、御支援を頂き日本の貧しいオペラ界をよりよくして行きたいと思います。ではこの位で。

* 卒業生 芸大オペラ10周年を迎えて

五十嵐喜芳 木村宏子 栗林義信
 中村健 岩井輝子 大崎幸子
 平野忠彦 小笠原美智子 宍倉正信

(第10回記念)

ヴェルディ作曲

「ファルスタッフ」

第3幕(原語演奏)

MUSIC BY GIUSEPPE VERDI

OPERA FALSTAFF IN THREE ACTS 6 SCENES

総 監 督 ニコラ・ルッチ 柴 田 睦 陸
 指 揮 ニコラ・ルッチ
 演 出 長 沼 廣 光
 装 置 古 賀 宏 一

照 明 秋 本 道 男
 衣 裳 河 盛 成 夫
 振 付 美 二 三 枝 子
 舞 台 監 督 林 正 喜 山 内 義 夫
 合 唱 指 導 畑 中 良 輔 佐 々 木 行 綱
 副 指 揮 三 石 精 一 遠 藤 雅 古
 プロンプター 中 野 俊 也
 出 演 東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ講座学生
 合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽科オペラ専攻学生
 管 弦 楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽部
 舞 踊 美二三枝子舞踊団

配 役

役 名		出演日	
		21 日	22 日
ファルスタッフ	Falstaff	横 田 浩 和	丹 羽 勝 彦
フェントン	Fenton	田 原 祥 一 郎	黄 耀 明
フォード	Ford	渡 辺 明	佐 伯 雅 巳
カーユス	Dr. Cajus	吉 田 博 久	河 瀬 柳 史
バードルフォ	Bardolfo	山 岸 靖	加 藤 義 也
ピストラ	Pistola	鈴 木 義 弘	持 田 篤
アリーチェ	Mrs. Alice Ford	中 谷 明 子	宮 崎 美 智 子
ナネッタ	Nannetta	加 藤 順 子	寺 嶋 尚 子
メグ	Mrs. Meg Page	高 嶋 美 枝 子	大 野 牧 子
クィックリー	Mrs. Quickly	金 森 静 子	矢 野 恵 子

第11回

芸大オペラ研究発表

モーツァルト作曲

「フィガロの結婚」

全4幕(原語上演)

MUSIC BY W. A. Mozart

“LE NOZZE DI FIGARO” Opera buffa in 4 Acts

総監督 ニコラ・ルッチ 柴田 陸 陸
 指揮 ニコラ・ルッチ
 演出 長 沼 廣 光
 装置 古 賀 宏 一
 照明 秋 本 道 男
 衣裳 河 盛 成 夫
 振付 江 川 明
 舞台監督 林 正 喜
 合唱指揮 畑 中 良 輔 佐々木 行 綱
 副指揮 三 石 精 一
 副指揮並チェンバロ 中 野 俊 也

コーチ 臼井英男 川口耕平 新妻紀子
 出演 東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ講座学生
 合唱 東京芸術大学音楽学部声楽科学生
 管弦楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部
 バレエ 東京バレエ・グループ

日 時 昭和40年9月22日(水) 6時開演
 23日(木) //

会 場 日比谷公会堂

配 役

伯 爵 Conte 22 日 吉江 忠 男 23 日 高橋 修 一

伯爵夫人 Contessa 永 味 八重子 村上 路 子
 スザンナ Susanna 尾板 尚 子 安田 祥 子
 フィガロ Figaro 常森 闘 志 佐伯 雅 巳
 ケルビーノ Cherubino 市丸 蒼 生 高嶋 美 枝 子
 マルチェリーナ Marcellina 井上 美 紗 子 金 森 静 子
 バジリオ Basilio 楠 光 雄 吉田 博 久
 ドン・クルツイオ Don Curzio 中山 顕 弘 中山 顕 弘
 バルトロ Bartolo 黒 岩 悟 丹羽 勝 彦
 アントニオ Antonio 白 幡 武 持 田 篤
 バルバリーナ Barbarina 梅 原 照 子 梅 原 照 子

踊 手 水野 貴 永 子 水野 貴 永 子
 小原 織 江 小原 織 江
 植田 好 文 植田 好 文
 岡田 祥 造 岡田 祥 造
 (東京バレエ・グループ) (東京バレエ・グループ)

第12回

芸大オペラ研究発表

渋谷公会堂

1966年9月27・28日 P.M.6:30

モーツァルト作曲

ドン・ジョヴァンニ

全2幕(原語上演)

music by W. A. MOZART

“DON GIOVANNI” Opera buffa in 2 Acts

指 揮 ニコラ・ルッチ
 演 出 長 沼 廣 光

美術小松 栄
 照明 秋本 道男
 美術助手 水野 潤子
 振付 江川 明
 舞台監督 清宮 秀高 古川 慶弘
 合唱指揮 畑中 良輔 佐々木 行綱
 副指揮 三石 精一
 副指揮 中野 俊也
 チェンバロ
 管弦楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部
 出演 東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ講座学生
 合唱 東京芸術大学音楽学部声楽科学生
 パレエ 東京パレエ・グループ

—配 役—

役名	27日	28日
ドン・ジョヴァンニ Don Giovanni	佐伯雅巳	吉江忠男
ドンナ・アンナ Donna Anna	川口千枝	林康子
ドン・オッタヴィオ Don Ottavio	吉田博久	井上善策
騎士長 Il Commendatore	黒岩 悟	岡田有弘
ドンナ・エルヴィラ Donna Elvira	村上路子	宮崎博子
レポレルロ Leporello	工藤 博	古川卓一
マゼット Masetto	白幡 武	名倉省三
ツェルリーナ Zerlina	尾坂尚子	遠藤祐子
踊手 水野貴永子 新井雅子	畑佐俊明	植田好文

第13回

渋谷公会堂

1967—9.28.29 P.M.6:30

G. ロッシーニ作曲
 アルジェリアのイタリア人
 (本邦初演) —全3幕(原語上演)—
 music by G. ROSSINI
 “L’Italiana in Algeri” 3 Acts

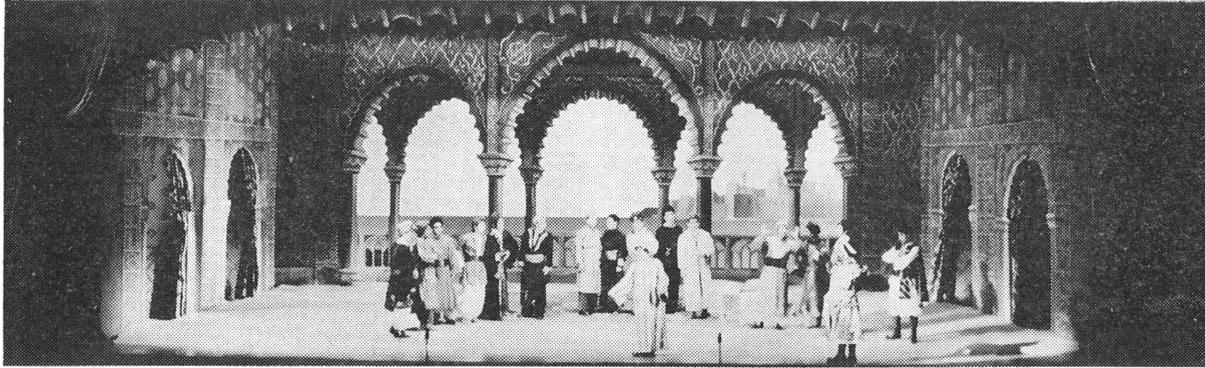
指揮 ニコラ・ルッチ
 演出 長沼 廣光
 美術 三林 亮太郎
 照明 秋本 道男
 舞台監督 清宮 秀高
 合唱指揮 畑中 良輔
 “ ” 吉岡 巖
 チェンバロ 中野 俊也
 管弦楽 東京芸術大学音楽学部
 管弦楽研究部
 合唱 声楽科学生

—配 役—

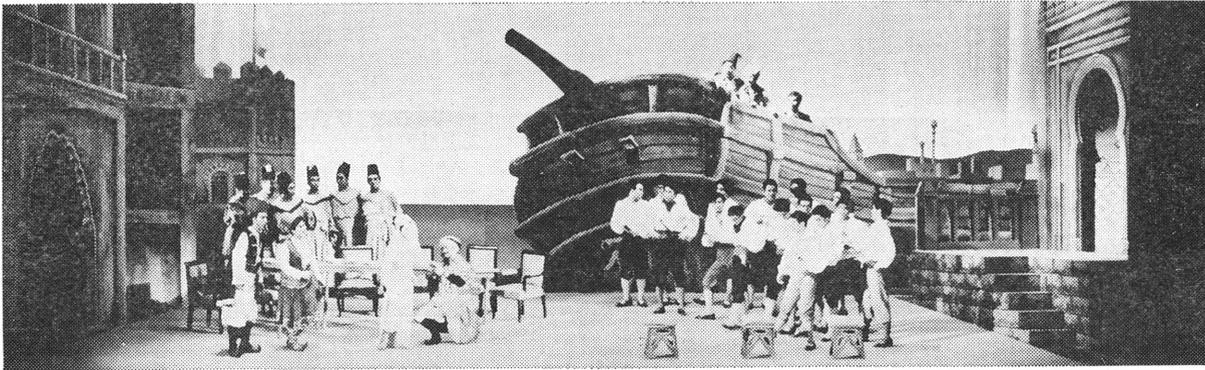
役名	28日(木)	29日(金)
ムスターファ Mustafa	鈴木 義弘	梅原 秀次郎
エルヴィーラ Elvira	遠藤 裕子	安田 祥子
ズルマ Zulma	金森 静子	三輪 敦子
ハーリー Haly	白幡 武	工藤 博
リンドーロ Lindoro	森 敏孝	中村 健
イサベルラ Isabella	矢野 恵子	木村 宏子
タッデオ Taddeo	佐伯雅巳	古川 卓一

* ロッシーニとこのオペラ

宮沢 縦一



第13回芸大オペラ定期発表会。「アルジェリアのイタリア人」第1幕第1場〈ムスターファの宮殿の一室〉(写真提供 長沼廣光)



同発表会。「アルジェリアのイタリア人」第1幕第2場〈嵐のあとのアルジェリアの海岸〉(写真提供 長沼廣光)

第14回

文京公会堂

1968—10 : 16. 17 P.M.6 : 00

D. チマローザ作曲

秘密の結婚

—全2幕(原語上演)—

Music by D. CIMAROSA

“IL MATRIMONIO SEGRETO” 2 Acts

指揮 ニコラ・ルツチ
 演出 長沼廣光
 装置 三林亮太郎
 衣裳 藤森瑛子
 照明 秋本道男
 舞台監督 清宮秀高
 林三好
 チェンバロ 中野俊也

出演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部
 管弦楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

—配 役—

役名	16日(木)	17日(金)
ジェロニモ Geronimo	佐藤征一郎	鈴木義弘
エリゼッタ Elisetta	林康子	中村邦子
カロリーナ Carolina	森敬恵	安田祥子
フィダルマ Fidalma	金森静子	武藤道子
伯爵 Il Conte Robinson	佐伯雅巳	竹沢嘉明
パオリノー Paolino	藤沼昭彦	森敏孝

召使 Servant 神戸園光, 椎名隆雄, 大野静竜
 乳母 Nurse 黒川和子
 コック Cook 京村資

第15回

都市センターホール

1969—9 : 19. 20 P.M.6 : 00

バイジェルロ作曲

セヴィラの理髪師

—全2幕—(原語上演)

Music by G. PAISIELLO

“IL BARBIERE DI SIVIGLIA” 2 Acts

指揮 ニコラ・ルツチ
 演出 長沼廣光
 装置 三林亮太郎
 衣裳 藤森瑛子
 照明 秋本道男
 舞台監督 清宮秀高
 チェンバロ 中野俊也
 マンドーラ 竹内郁子
 練習ピアノ 中野俊也
 黒沼幸子

出演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部
 管弦楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

—配 役—

	19日(金)	20日(土)
伯爵 Il Conte D'Almaviva	山形忠顕	中村健

ロジーナ Rosina	森 敬恵	菊原 史英
バルトロ Bartolo	鈴木 義弘	佐藤 征一郎
フィガロ Figaro	平野 忠彦	佐伯 雅巳
バジリオ Don Basilio	大野 静勇	竹沢 嘉明
ズベリアート Lo Svegliato	湯浅 富士郎	大野 静龍
ジョビネット Giovinetto	神戸 圀光	神戸 圀光
アルカデ Un Alcade	長谷川 敏	長谷川 敏
公 証 人	椎名 隆生	椎名 隆生
役 人	松下 武史	多々羅 迪夫
	岩 阪 憲 和	西 原 匡 紀

第16回

昭和45年9月24日(木) 25日(金) 午後6時30分

文京公会堂

岡本綺堂 原作 修禅寺物語 全1幕3場
清水 脩 作曲

総監督 柴田 陸

指揮 三石 精一 演出 長沼 廣光

演出補佐 河内 節子 演出協力 浅見 重信 装 置 三林 亮太郎 照 明 秋本 道男

舞 台 監 督 清宮 秀高 林 三 好

声 楽 コ ー チ

佐々木行綱 吉岡 巖 佐伯雅巳 佐藤征一郎 金森静子 菊原史英

コ ー チ

川口耕平 中野俊也 高橋誠也 黒沼幸子

スライド写真撮影 (東京国立文化財研究所) 市川 和 正

出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部

東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生
管 弦 楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

—配 役—

24日(木) 25日(金)

源左金吾頼家	松下 武史	山形 忠 顕
面作師夜叉王	大野 静 竜	西原 匡 紀
夜叉王の娘かつら	黒川 和 子	内田 裕 子
かえで	石中 はるみ	野口 幸 子
かえでの婿春彦	長谷川 敏	長谷川 敏
下田五郎景安	尾 畑 秀 治	尾 畑 秀 治
金窪兵衛尉行親	多々羅 迪 夫	多々羅 迪 夫
修禅寺の僧	竹沢 嘉明	竹沢 嘉明
行親の家来1	薦田 義明	薦田 義明
2	島村 武男	島村 武男
3	森田 澄男	森田 澄男
4	山口 俊彦	山口 俊彦

*ごあいさつ

池内友次郎

*御あいさつ

オペラ主任 柴田 陸

第17回

昭和46年9月23日(木) 24日(金) 午後6時30分

日比谷公会堂

ダ・ポンテ台本 モーツァルト作曲

女はみんなこうしたもの

全2幕(原語上演)

Text by Lorenzo da Ponte Music by W. A. Mozart

COSÌ FAN TUTTE Two acts.

総監督 柴田陸

指揮 ニコラ・ルッチ 演出 長沼廣光

演出補佐 装 置 衣 裳 照 明

河内節子 三林亮太郎 徳永恭子 秋本道男

舞台監督 演出助手

清宮秀高・林 三好 工藤智昭

チェンパロ 黒沼幸子

コーチ 黒沼幸子・高橋誠也

出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部

東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生

管 弦 楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽4年有志

—配 役—

		23日(木)	24日(金)
フィオルディリージ	Fiordiligi	横山 操	佐藤康子
ドラベルラ	Dorabella	中西和世子	内田裕子
デスピーナ	Despina	石中 はるみ	斎藤敬子
フェルランド	Ferrando	尾畑秀治	神戸園光
グリエルモ	Guglielmo	島村武男	佐伯雅巳
ドン・アルフォンゾ	Don Alfonso	鈴木義弘	薦田義明

第18回

マスカーニ作曲 “ロドレッタ” 全3幕 原語上演・本邦初演
Music by P. Mascagni LODOLETTA Three Acts

柴田陸・総監督

ニコラ・ルッチ・指揮 長沼廣光・演出

北川 勇・装置 田中厚子・衣裳 沢田裕二・照明 石田種生・振付

清宮秀高・林 三好・舞台監督 黒沼幸子・高橋誠也・コーチ及副指揮

出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部

東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生

管 弦 楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽4年オペラ履修学生

キャスト

		9月27日(水)	28日(木)
ロドレッタ	Lodoletta	日比啓子・和田悠紀子	
フランメン	Flammen	尾畑秀治・月岡卓雄	
気違い女	La Pazza	目次裕子・内田裕子	
マウドウ	Maud	李 静美・李 静美	
ヴァナール	La Vanard	佐藤康子・佐藤君子	
ジャンノット	Giannotto	佐伯雅巳・藤田澄夫	
フランツ	Franz	島村武男・竹沢嘉明	
アントニオ	Antonio	鈴木義弘・薦田義明	
郵便配達	Il Portalettere	神戸園光・神戸園光	
ある声	Una voce	河瀬柳史・河瀬柳史	
合 唱		村の子供・村人・フランメンの友人達・ヴァイオリン弾き 舞踊会の客など	

日 時 9月27日(水) 28日(木) 午後6時開場 6.30開演
会 場 東京郵便貯金ホール

*《ロドレッタ》をめぐる

宮 沢 縦 一

第19回

モーツァルト作曲 “かまとと娘” 全3幕 原語上演・本邦初演

Music by Mozart LA FINTA SEMPLICE Three Acts

柴田 陸 陸・総監督

ニコラ・ルッチ・指揮 河内 節子・演出

北川 勇・装置 田中厚子・衣裳 秋本道男・照明 工藤智昭・演出助手

清宮秀高・林三好・舞台監督 川口耕平・チェンバロ
及びコーチ 高橋誠也・コーチ

出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部

東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生

管 弦 楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

キャスト

26日(水) 27日(木)

ロジーナ ハンガリアの男爵令嬢……日 比 啓 子 目 次 裕 子
Rosina

フラカッソ その兄 大尉……………月 岡 卓 雄 宮 本 雄 次
Fracasso

ドン・カッサンドロ 地主……………竹 沢 嘉 明 森 田 澄 夫
Don Cassandro

ドンナ・ジャチンタ その妹……………岡 嶋 智 子 佐 藤 啓 子
Donna Giacinta

ドン・ポリドーロ その弟……………仁志田 正 人 河 瀬 柳 史
Don Polidoro

ニネットタ 小間使……………山 口 悠 紀 子 李 静 美
Ninetta

シモーネ フラカッソの召使……………岸 本 力 山 口 俊 彦
Simone

日 時 9月26日(水) 27日(木) 午後5時30分開場 6時開演

会 場 都市センターホール

*モーツァルトと《かまと娘》のこと

宮 沢 縦 一

第20回

昭和49年9月26日(木) 27日(金)

郵便貯金ホール

プッチーニ作曲 “外 套” 1幕

“ジャンニ・スキッキ” 1幕

原語上演

総監督 柴田 陸 陸

指揮 ニコラ・ルッチ 演出 長 沼 廣 光

装置 北 川 勇 衣裳 太田厚子 照明 秋本道男

舞台監督 清 宮 秀 高・林 三 好 演出助手 工藤智昭

コーチ 川口耕平・高橋誠也

出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部

東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生

管弦楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽4年有志

キャスト

“外 套”

ミケーレ 奥田 誠 ジョルジュッタ 小林明美

ルイーダ 月岡卓雄 フルゴラ 中沢房子

タルバ 山口俊彦 ティンカ (26日) 島津 与外次

女の声 内田裕子 (27日) 藤原章雄

男の声 河瀬柳史

合 唱 坂田泰子 津下美奈子 長島洋子 除野弘子

岡崎智恵子 小見佳子 宮田伊知子

石橋久和 生平祐司 酒井良一 大山裕正

斉藤俊夫 鈴木 茂 藤野祐一

“ジャンニ・スキッキ”

ジャンニ・スキッキ	山本隆則	ラウレッタ	(26日)松本泰子
ツイータ	金森静子		(27日)出口正子
リヌッチオ	二神二郎	ゲラルド	仁志田正人
ネルラ	鈴木真貴子	ゲラルディーノ	仁志田正名*
ベット	白坂俊一	シモエネ	山田健司
マルコ	竹沢嘉明	チェスカ	大志万妙子
医者スピネロッチオ	高木滋夫*	公証人アマンティオ	山口俊彦
靴屋ピネリーノ	佐伯雅巳	染物屋グッチオ	桑原啓郎*

*印は声楽4年オペラ履修生

20回公演に当って

東京芸術大学音楽学部 学部長 石桁真礼生

東京芸術大学音楽学部のオペラ定期が、本年第20回を迎えたということに多くの感懐を持っています。今回を迎える迄、幾多の紆余曲折、難問題に打ち当たったりして道は険しかったと思われます。しかしこの間に、現在斯界で活躍している中堅の歌手が数多く巣立ち、その果した成果は大きいと思います。

オペラの研究は、講座で行っている、声楽、演出、演技の研究のみでなく、管弦楽、美術等の完全な協力に依って、はじめてオペラの研究上演が可能になるのだと思います。それが至難な故に芸術大学が果さなければならぬ使命は大きいと考えます。

20回を迎えたことをお慶びすると共に、関係者各位の一層の努力をお願いする次第です。

芸大オペラ20回公演に寄せて

東京芸術大学音楽学部声楽科主任教授 畑中良輔

五十嵐喜芳君や栗林義信君たちの第1回芸大オペラ公演「椿姫」から、もう今回で20年を迎えました。早いものです。

現在、日本のみならず、世界の歌劇場で活躍している日本人歌手の大半

は、この芸大オペラから巣立って行きました。今や日本のオペラ界は、昔のように手さぐり足さぐりの時代ではなくなって来ました。多くの試行錯誤を重ねながら、最も合理的なオペラ表現法を、私達は更に深く探求して行かねばならないと思っています。

*20回公演によせて

東京芸術大学音楽学部声楽第5講座(オペラ)主任教授 柴田陸

第21回

昭和50年9月26日(金)27日(土)

郵便貯金ホール

プッチーニ作曲 “ラ・ボエーム” 第4幕
by Puccini “La Bohème” Four Acts
(原語上演)

—スタッフ—

総監督 柴田陸

指揮	ニコラ・ルッチ	演出	鈴木敬介
装置	北川勇	衣裳	太田厚子
照明	沢田祐二	合唱指揮	平野忠彦
演出助手	工藤智昭	舞台監督	清宮秀高
コーチ	中野俊也・黒沼幸子		

—キャスト—

	26日	27日	
ロドルフォ	響場知昭	森靖博	
マルチェロ	山本隆則	小川裕二	
ショナール	奥田誠	竹沢嘉明	
コリーネ	山田健司	川口豊	

ベ ノ ア 佐 伯 雅 巳 佐 伯 雅 巳
アルチンドロ 竹 沢 嘉 明 奥 田 誠
ミ ミ 石 崎 裕 子 尾 坂 洋 子
ムゼッタ 土 橋 万 里 三 繩 緑

出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部
東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生
管 弦 楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部
合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽3年オペラ履修生

第22回

昭和51年9月30日(木) 10月1日(金)

郵便貯金ホール

チレア作曲 “アルルの女” 全3幕
F. Cilèa *L'Arlesiana* Three Acts

(本邦初演)
(原語上演)

—スタッフ—

総監督 柴 田 陸 陸

指 揮 ニコラ・ルッチ 演 出 長 沼 廣 光
装 置 北 川 勇 衣 装 渡 邊 安 子
照 明 辻 本 晴 彦 振 付 石 田 種 生
演出助手 工 藤 智 昭 舞 台 監 督 清 宮 秀 高
合唱指揮
コーチ 中 野 俊 也 コーチ 黒沼幸子・竹内澄子

—キャスト—

9月30日(木) 10月1日(金)
ロ ー ザ 森 池 日 佐 子 田 中 淑 恵
フェデリーコ 川 上 茂 大 西 由 則
ヴィヴェッタ 松 井 洋 子 越 智 恵 美 子

バルダッサレー 小 川 裕 二 大 山 裕 正
メティフィオ 植 村 節 男 阿 見 剛
マ ル コ 川 口 豊
白痴の子 内 田 裕 子

出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部
東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生
管 弦 楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部
合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽3年オペラ履修生

* 歌劇「アルルの女」

福 原 信 夫

第23回

昭和52年9月29日(木) 30日(金)

郵便貯金ホール

U. ジョルダノー作曲 “メーセ・マリアーノ” 全1幕 本邦初演
(聖母マリアの月) 原語上演

Umberto Giordano “Mese Mariano” One Act Opera

E. ウォルフ・フェラーリ作曲 “スザンナの秘密” 全1幕 原語上演
Wolf-Ferrari “Il Segreto di Susanna” One Act Opera

スタッフ

総監督 柴 田 陸 陸

指揮 ニコラ・ルッチ 演出 長 沼 廣 光
装置 北川 勇 照明 辻本晴彦 衣装 渡邊安子 演出助手 工藤智昭
舞台監督 清宮秀高 直井研二
合唱指揮 渡 邊 顯 鷹 (東京荒川少年少女合唱隊常任指揮)
副指揮及コーチ 中 野 俊 也 コーチ 黒沼幸子
出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部

大学院研究科オペラ専攻生・声楽科3年オペラ履修生
 児童合唱 東京荒川少年少女合唱隊
 管弦楽 東京芸術大学管弦楽研究部

キャスト

“メーセ・マリアーノ”

	29日(木)	30日(金)
カルメーラ Carmela	大倉由紀枝	木村紀子
学院長・ドン・ファビアーノ Don Fabiano	峰茂樹	鈴木義弘
伯爵夫人 La Contessa	沢田祥子	沢田祥子
尼僧長 La Superiora	金森静子	金森静子
修道女パツィエンツァ Suor Paziienza	田中淑恵	田中淑恵
チェレステ Celeste	松井洋子	松井洋子
クリスティーナ Cristina	内田裕子	内田裕子
マリア Maria	越智恵美子	越智恵美子
アニーゼ Agnese	駒木佐和子	長坂玲子
女の子ヴァレンティーナ Valentina (La bambina)	布川洋子	池田京子

他子供達多数

“スザンナの秘密”

	29日(木)	30日(金)
伯爵ジル Il Conte Gil	竹沢嘉明	沢脇達晴

伯爵夫人スザンナ Il Contessa Susanna 津下美奈子 五十嵐郁子
 召使サンテ Sante 鈴木義弘 峰茂樹

* 歌劇「聖母マリアの月」全一幕

解説 福原信夫

* 歌劇「スザンナの秘密」全一幕

//

第24回

昭和53年9月29日(金) 30日(土)

郵便貯金ホール

G. プッチーニ作曲 “尼僧アンジェリカ” 全1幕 原語上演
 G. Puccini “Suor Angelica” One Act Opera

G. ロッシーニ作曲 “婚約手形” 全1幕 原語上演
 G. Rossini “La Cambiale di Matrimonio” One Act Opera

—スタッフ—

総監督 柴田陸

指揮 ニコラ・ルッチ 演出 長沼廣光
清宮秀高

装置 北川勇 舞台監督 直井研二 副指揮 大町陽一郎

照明 辻本晴彦 演出助手 工藤智昭 チエンパ 中野俊也

衣裳 渡邊安子 コーチ 黒沼幸子

出演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部
 大学院研究科オペラ専攻生・声楽科3年オペラ履修生

管弦楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

—キャスト—

“尼僧アンジェリカ”

尼僧アンジェリカ Suor Angelica (29日)	大倉由紀枝
(30日)	浅田啓子
公爵夫人 La Zia Principessa	斉藤直子
女子修道院長 La Badessa	金森静子

修道長	La Suora Zelatrice	木村紀子
尼僧ジェノヴィエツファ	Suor Genovieffa	津下美奈子
オズミーナ	Ozmina	五十嵐郁子
ドルチーナ	Dolcina	沢田祥子
修練長	La Maestra Delle Novizie	内田裕子
修練女	La Novizia	平松英子
労働修女	La Conversa	木村美加
〃		根津たみ子
托鉢係の修道女	La Cercatrici	五十嵐郁子
〃		長谷川百々子

“婚約手形”

(29日) (30日)

トビア・ミル	Tobia Mill	竹沢嘉明	竹沢嘉明
スロック	Slook	山本隆則	山本隆則
ファニー	Fanny	山本理恵子	森山好恵
エドアルド・ミルフォート	Edoardo Milfort	林永清	饗場知昭
ノルトン	Norton	藤野祐一	鈴木義弘
クラリーナ	Clarina	内田裕子	中島みさ子

合唱及び登場者

大沼美恵子	越智博子	興梠みどり	竹内智子
西輝子	野瀬恵子	東由子	前田陽子
市川澄子	小田久美	斉藤純子	斉藤すぎな
東辻なおみ	大島豪	小野瀬照夫	永田峰雄
松林良晴	若林浩	竹崎和俊	中良克則

*ニコラ・ルッチ教授に感謝 東京芸術大学学長 福井直俊
音楽学部長 浜野政雄
声楽第5講座(オペラ)主任教授 柴田陸陸
オペラ研究部 栗林義信

第25回

昭和54年9月28日(金) 29日(土)

開場 午後6:00 開演 午後6:30

郵便貯金ホール

清水脩 作曲 “修禅寺物語” 全1幕 3場

—スタッフ—

指揮	柴田陸陸	演出	柴田陸陸
			河内節子
装置	妹尾河童	舞台監督	清宮秀高
照明	吉井澄雄	副指揮・コーチ	中野俊也
衣裳	緒方規矩子	コーチ	黒沼幸子
〃	渡辺安子	演出助手	工藤智昭
装置助手	越野幸栄	舞台監督助手	直井研二
衣裳助手	八重田喜美子	協力	佐野萌 (宝生流)

出演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部
大学院研究科オペラ専攻生・声楽科学生
管弦楽 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

—キャスト—

	28日	29日
源左金吾頼家	伊藤俊三	市山恵一
面作師夜叉王	羽染光男	砂田直規
夜叉王の娘	中村紀子	諸橋啓子
〃 かねで	森山好恵	應和恵子
かねでの婿 春彦	河瀬柳史	林永清
下田五郎景安	山岸靖	山岸靖

金窪兵衛行親	的場安朗	竹沢嘉明
修禪寺の僧	島田啓介	藤野祐一
行親の家来軍兵	辻秀幸 (28・29日)	
	大門康彦	〃
	今村昌文	〃
	国土潤一	〃
	安達求	〃
	中嶋俊夫	〃



柴田睦陸

* 「芸大オペラ」第25回定期公演に寄せて 学長 福井直俊
音楽学部長 浜野政雄

柴田さんへの感謝の言葉 清水脩

「修禪寺物語」は、戦後の混乱の中であって、ほぼ5年がかりで作曲した。むろん、これは私の最初のオペラ作品である。

題材をどうして選んだかについては、これまで方々で書いたので、ここで繰り返すのはやめておく。ただ一言だけ言っておきたいのは、最初から歌舞伎狂言に取るつもりであったことである。「修禪寺物語」は、古典の狂言でなく、いわゆる新歌舞伎に属するので、これを古典と並列させるのは無理であろうが、いずれ後には、近松その他の数多くの古典の狂言からえらぶ時があるろう。ひとまず、綺堂ものから手を付けようという気持が働いていた。しかし、以来、10数曲のオペラを作曲したが、未だに古いもの

を手がけていない。「俊寛」はたしかに伝統的な歌舞伎である。しかし、私が「俊寛」をとりあげたとき、「平家女護島」の中の「俊寛」よりも、能の「俊寛」の方に余計に惹かれ、能を主材とした。

「修禪寺物語」が、私をひきつけたのは、これが歌舞伎の中でも、異色のものであり、最もオペラになりやすいと判断したこともあるが、それよりも、夜叉王の芸への執念というか、常識的な言葉でいうと、その職人気質であった。もう一つ、突っ込んでいえば、夜叉王の気質の他に、桂が殿上人か弓取ならでは夫に持たぬと、誇らしげに言うところも、私をひきつけた。桂の出世欲は反面、私に嫌悪感を覚えさせたが、私とても、ある面では同じような俗っぽい出世欲がなかったとはいいい切れぬ。

夜叉王とその姉娘の性格を、ないまぜて、劇的な緊張感を舞台に醸し出すことができれば、私の意図は半ば成功するのではないかと考えた。いうまでもなく、その他の登場人物にもそれぞれ、ドラマを構成する上で、重要な役割を果している。このオペラの初演（昭和29年秋、関西歌劇団一大阪）および、東京初演（翌30年始め）以来、演出に当たってもらった武智鉄二さんも、この劇にとっては、すべての人物、つまりどの人物も、抜きさしならぬ役割を持っている。そのうちの一人でも拙い演技をしたら、全体をぶちこわしてしまうと言っている。たとえば、第2場で3人ほど登場する軍兵がそうである。ほんのひと言かふた言しか、科白がないが、幕切れの立ち回りで、ぶざまなことをやったら、それは第3場の大詰めの緊張感を破壊すると、私も信じている。ましてや、その外の役に、僧、五郎、行親、もちろん楓、春彦にいたっては寸分のすきもあってはならない。

作曲当時、私はそんな思いを、日に新たにしながら、五線紙に向っていた。5年間の苦しさは、もう今はあまりはっきりとはおぼえていない。が、初演当時の日々のけいこ、オーストラの最初のけいこ、初演当日の興奮などは、今でも昨日のここのように憶えている。今はなくなったが、当時の大阪朝日会館、東京の日比谷公会堂、共立講堂の客席で、私がどんな思いをしたか、夢のようでもあり、反面きびしい現実にもふりかかっていた。朝比奈隆さん（大阪）森正さん（東京）のバトンの動きは、今ははっきり眼

の底にきざみつけられて消えない。

大阪と東京を合わせて、初演の演唱者の数は20人を越す。その一人一人について、私は熱いまなざしで見ている。どの一人を取っても、書きたいことがある。しかし今はそれをする場所でもない。ただ一人柴田陸陸さんについてだけは、この機会に言っておきたい。

いうまでもなく、柴田陸陸さんは頼家役をうたった。輝やかな声と円熟した演技力を発揮された時期に当たっていた。短気で神経質な頼家が、鎌倉を追われて、伊豆に幽閉されるという劇的設定を心にくいほど見事に表現されていた。持ち前の気品を失わず、夜叉王に迫り、桂との恋によって、わずかながら心安らかになろうとしていた頼家の心理を、つらぬき通すように、舞台の上から聴衆に投げかけておられた。中でも第2場の桂との道行の深い演唱は私を有頂天にさえた。或いはそれ以上に、柴田＝頼家は、他のすべての人物との間に、音楽上のアンサンブルを寸分のすきもなく創り上げられていた。

その柴田陸陸さんが、芸大オペラ研究部と芸大オーケストラの総力をあわせて上演するというのだから、私の心はおどっている。最初この話をきいたのは昨年秋だったと思う。何年前かに、芸大オペラを長沼廣光さんの演出で聴いたときにも、練り上げた、きめの細かい上演に感動したが、今度はそれにも増して、細部に到るまで練り上げ、いささかの妥協もないものになるものと確信していた。話にきくと、柴田さんは来年には停年で芸大を退職されるそうだが、そのはなむけとして、芸大の「修禪寺」として決定的なものにしたいという。柴田さんが指揮も演出もされるということも、私にとっては楽しみであり、それ以上に期待に胸のふくれる思いがしている。

いうまでもなく、キャストは、ごく一部を除き、芸大に席をおく学生諸君である。スタッフは柴田さんはさておき、河内節子さんが演出に加わる外、すべてベテランたちが当たっている。上演までのけいこに、私は3、4度出席したが、芸大のオペラけいこ場に溢れる若々しい熱気に、こちらも思わず引き込まれて、かつてない充実した時間を持った。

柴田さんの音楽は、さすがに声楽家でなければできない仕上りを見せているのも、私には、ある意味ではめずらしく、心あたたまる思いをしている。それというも、始めは二管編成を取り上げるようになっていたのを、オーケストラの人からの応援で、原作の二管編成に変更されたせいでもある。幸いというか、私は思い立つ所があって、今年の正月から、二管編成のオーケストラを、ごく小部分の改訂を施しながら、全面的に書きかえていた矢先であった。作曲の時に書いた原稿に、こよない愛着を覚えながら、ほぼ4ヶ月かかって400頁近いスコアを書き変えたことも手伝って、こん度の上演ほど、胸がおどるのは初めてである。初演以来、50数回の上演があったが、私にとって、このようないろいろの意味で、それは記念すべきものとなるだろうと信じている。

この夏、私は15番目のオペラ（補陀落）の筆をおろしたばかりである。三幕ものなので完成までに1年半はかかるだろうと思うが、こんどの「修禪寺物語」で、柴田さんの、作品を徹底的に掘り下げた上演に接することにより、またとない励ましをうるものと思っている。感謝のことばもない。

ただただ、御成功をいのるばかりである。

柴田陸陸さん、本当にありがとう。

第25回「修禪寺物語」までの思い出を——柴田陸陸
戦後間もなく、上野の杜にまでおし寄せてきたオペラの津波は、音楽学校を避けては通らなかった。

はじめ、研究部をまかされて意欲を燃やしたものであるが、多少ブレーキのおかしいボンコツ・エンジンの私では続かなかった。

しかし年も移り、諸般の状況から数年後再びオペラに帰ることになったのだが、オペラの虫のように言われて仕事に没頭出来た自分を、本当に幸せ者だと思っている。

「芸大オペラ」になって今年で25年。

大学の理解と職場に於ける協力者の強い支援で、「芸大オペラ」は驚異

的な発展を遂げた。そのことは、私にとっては何にもまさる喜びであるといわねばならない。

しかしこの発展の蔭にあって、「芸大オペラ」の種まきの為に尽力下さったお二人の人をあげずにはおられない。

全然予算のない「芸大オペラ」上演の為に、心よくスポンサーとなって下さったそのお二人は、最初の3回をビデオ・ホールの小谷社長、次の2回をカワイ楽器の河合社長のお二人である。此の際、このことを強調し、心からの謝意を表したい。

さて、私のハプニング人生の終りは、今回の「修禪寺物語」でつきるように思える。

よくぞ大学が、その定期公演の指揮者に私を指名したものだと思う。私自身が驚いたし、危惧も勿論まっ先に感じた。

しかし、声楽部の御気持があったとしても、管弦楽部の方で素人に振らせることはないだろう——ぐらいに軽く考えていた。しかし結果は「すんなり可決」で驚いてしまった。

その知らせを聞いた時、一瞬息をのんだ私は、真実泣きたい程の感激をおぼえたことを告白する。それはオペラの指揮が出来る喜びなどでは勿論ない。(とんでもない。今でもオーケストラは怖い。気が遠くなりそうな恐怖心に、どう打ちかつかが今の気持である。)
「あなたは踊っておればよい。わしらでちゃんとやってみせる。良いお土産に下さいよ！」という、なじみのオケの人からの声が聞こえてくるような気がして、その心の温かさ、やさしさに胸が一ぱいになったのである。

さて、一教授の退官に際し、大学が公的機関を動かして特別なことをするなど、ある筈はない。この度の「修禪寺物語」の指揮と私の定年には何の関連もないことを御ことわりしておきたい。私はただ、与えられたこのチャンスに、私のこの仕事を通して学生達に「声楽」をより深く理解する為の「何か？」を身をもって伝え、その上で芸大の名誉を傷つけないよう心がけるだけである。初演以来かかわりをもってきた「修禪寺物語」の知識と、30数年間、それだけで生きてきたオペラの知識を要約して、私の限

界をぶちつけたいと願っている。

この度の公演に際し、私がオペラに目覚めた頃からの友人である妹尾河童氏、吉井澄雄氏、緒方規矩子氏等、当代一級の方達を始め、多くの部外の方達が、芸大の為に、経済的なことなど度外視して御協力下さったことは、私達を始め学生達にとって生涯忘れることの出来ない感激だったと思う。主任としての立場も添えて厚く御礼を申し上げたい。

又、当初、指揮と演出の担当ということで出発し、演出上でも一つの型を作りたい意向で、それなりに準備もしてきたが、指揮者としての指導をしながら、演出、演技指導等、余程の時間的な余裕がない限り、実際には不可能であることを知った。プランの設定に私の考えを述べることで、稽古の途中で随時口をはさむことぐらいで、演出の実際は河内節子さんにお願いした。何かとやりにくい点も多かったことと思い、感謝と同時におわびも申し上げたい。同時に、邦楽科(宝生流)の教授・佐野萌氏が、御多忙の中を色々御世話下さったことを申し添え、御礼の言葉にしたい。(オペラ科の将来に、邦楽科との強力な連繋は是非必要なことと思っている。)

オペラは総合芸術といわれ、一つのオペラの誕生に、音を出す人、舞台を作る人はある部分で、事務関係諸氏の労苦は大変なものだと承知しているが、学内事務関係諸氏(用務員諸氏も含めて)の温かい思いやりに、いつも有難い思いで一ぱいである。心からの御礼を述べると同時に、これから先々、いつまでもよろしくお願いしたいと願っている。

* 歌劇「修禪寺物語」

福原信夫

* 上演にあたって

オペラ研究部

第26回

1980年9月26日(金)・27日(土) 郵便貯金ホール

密 猟 者

作曲：A. ロルツィング 訳詞：原田茂生

Der Wildschütz
 composed by A. LORTZING
 Japanese version by Shigeo HARADA

指揮 マルティン・メルツァー 演出 長沼廣光
 装置 北川 勇 照明 辻本晴彦
 衣裳 渡邊安子 振付 石田種生
 舞監 清宮秀高 合唱指揮 大町陽一郎
 合唱指導 八尋和美 副指揮コーチ 中野俊也
 コーチ 黒沼幸子 舞監助手 工藤智明
 大道具製作 NHK美術センター 小道具及び履物 NHK美術センター
 衣裳 東京衣裳KK かつら 株式会社丸善かつら

出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部
 東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生
 合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽科3年オペラ履修生
 オーケストラ 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

26日 キヤスト 27日

羽 染 光 男…エーペルバッハ伯爵	Graf von Eberbach…	砂田直規
金 森 静 子…伯爵夫人	Die Gräfin …	内田裕子
市 山 恵 一…クロンタール男爵	Baron Kronthal …	饗場知昭
中 川 真 澄…フライマン男爵夫人	Baronin Freimann …	岩崎京子
内 田 裕 子… ナネッテ	Nanette …	金森静子
佐藤 征一郎… バクルス	Baculus …	島田啓介
喜多村 康子… グレーチェン	Gretchen …	高橋まゆみ
鈴木 義 弘…パンクラーティウス	Pankratius …	的場安朗
安 達 求… 宴会の客	Ein Gast …	福田文治

* 曲目解説

福原信夫

第27回

1981年9月24日(木) 25日(金)

郵便貯金ホール

* ごあいさつ

音楽学部長 浜野 政雄

東京芸術大学音楽学部オペラ研究部は同学部管弦楽研究部の協力を得て、毎年一回定期公演の形で研究発表を行っていますが、今年は19世紀前半のイタリア・ベルカント・オペラの作曲家の一人であるベッリーニの傑作「夢遊病の女」をとり上げました。夢遊病であるがゆえにとる行動から婚約者の誤解を受けるといふ状況設定がいささか現実ばなれていること、主役であるアミーナとエルヴィーノの役を歌える歌手が少ないこと、合唱に対する要求が他のオペラでは例を見ないほど大きいことなどの理由から、今日ではこのオペラが上演される機会は多いとはいえませんが、声を素材とした音楽というものを考えるとき、これほど優美で純粋な作品は少ないといえます。

学部長のごあいさつにもあります通り、今回のこの公演の演出のために、ウィーンからハンス・クリスティアン氏(文部省特別招聘教授)に来ていただきました。氏はウィーン大学で演劇学、劇場経営学を学び、同時に歌手としての教育も受けたというめずらしい存在で、1963年からカラヤンの要請でウィーン国立歌劇場の専属歌手として舞台上立っています。そのかわらヨーロッパ各地の劇場でオペラの演出を手がけ、1979年からはウィーン国立音楽アカデミーの演出の講師として後進の指導にあたっています。

オペラ研究部長 原田 茂生

夢遊病の女 全2幕(原語上演)

V. ベッリーニ作曲

(in original language) LA SONNAMBULA

VINCENZO BELLINI

指揮 大町陽一郎 演出 ハンス・クリスティアン
(ウィーン国立歌劇場)

装置 北川 勇 照明 吉井澄雄
衣裳 渡辺園子 舞台監督 清宮秀高
演出助手 工藤智昭 舞台監督助手 直井研二
イタリー語指導 東 敦子 副指揮 中野俊也
プロンプター 勝 郁子 コーチ 小谷彩子
及びコーチ
合唱指揮 伊藤栄一
合唱指導 中村健 合唱指導 平野忠彦

照明操作 A・S・G

大道具・小道具・冠物 株式会社NHK美術センター

衣裳 東京衣裳株式会社

かつら 株式会社丸善

出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部
東京芸術大学音楽学部大学院音楽研究科オペラ専攻生
合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽科3年オペラ履修生
オーケストラ 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

キャスト

	24日	25日
ロドルフォ伯爵	Il Conte Rodolfo 鈴木義弘	戸山俊樹
テレーザ	Teresa 内田裕子	金森静子
アミーナ	Amina 番場ちひろ	新井咲子
エルヴィーノ	Elvino 饗場知昭	蔵田雅之
リーザ	Lisa 関口志津江	平松英子
アレッシオ	Alessio 竹沢嘉明	山本隆則

公証人 Un Notaro 誉田昭宏 川畑卓

第28回

1982年9月24日(金) 25日(土)

郵便貯金ホール

*ごあいさつ

音楽学部長 渡辺高之助

オペラ研究部長 原田茂生

試金石 全二幕 原田茂生訳(本邦初演)

G. ロッシーニ作曲

(Translated by SHIGEO HARADA)

LA PIETRA DEL PARAGONE
GIOACCHINO ROSSINI

指揮 佐藤功太郎 演出 長沼 廣光

装置 川口直次 照明 吉井澄雄
衣裳 渡辺園子 舞台監督 清宮秀高
演出助手 工藤智昭 照明助手 奥畑康夫
副指揮 中野俊也 合唱指揮 松井和彦
合唱指導 平野忠彦 コーチ/チェンバロ 森島英子
コーチ/プロンプター 勝 郁子 コーチ 海保洋子

照明操作 A・S・G

大道具・小道具・冠物 株式会社NHK美術センター

衣裳 東京衣裳株式会社

かつら 株式会社丸善

出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部
東京芸術大学音楽学部大学院音楽研究科オペラ専攻生
合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽科3年オペラ履修生
オーケストラ 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

キャスト

	24日	25日
アズドゥルーバル伯爵	Asdrubal Count 戸山俊樹	福島明也
ファブリーツィオ, 従者	Fabrizio his follower 多田羅迪夫	山本隆則
フルヴィア	Donna Fulvia 平松英子	関口志津江
オルテンシア公爵令嬢	Ortensia Duchess 山口道子	岩井里香
クラリッサ男爵令嬢	Clarissa Baroness 内藤明美	内田裕子
ジョコンド, 詩人	Giocondo Poet 饗場知昭	河瀬柳史
パクーヴィオ, 画家	Pacuvio Painter 末吉利行	山崎岩男
マクロビーオ, 批評家	Macrobio Journalist 筒井修平	佐藤征一郎

* 曲目解説 歌劇「試金石」ジョアッキノ・ロッシーニ 福原信夫

第29回

1983年9月22日(木)・23日(金)

6時半開演

新宿文化センター

売られた花嫁 全三幕 原田茂生 多田羅迪夫共訳

B. スメタナ作曲

(Prodaná Nevěsta) THE BARTERED BRIDE

Japanese version by SHIGEO HARADA and MICHIO TATARA
BEDŘICH SMETANA

指揮 ヤン・ポッパー 演出 長沼 廣光

装置	川口直次	副指揮	中野俊也
照明	吉井澄雄	合唱指揮	松井和彦
衣裳	渡辺園子	合唱指導	伊藤栄一
舞台監督	清宮秀高	〃	中村健
演出助手	直井研二	〃	平野忠彦
照明助手	原田保	コーチ/ プロンプター	勝郁子
振付	石田種生	コーチ	小谷彩子
大道具	NHK美術センター	照明操作	A・S・G
衣裳	東京衣裳株式会社	かつら	株式会社丸善

出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部
東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生
合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽科3年オペラ履修生
オーケストラ 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部
バレエ 東京シティバレエ
アクトバット
ドゥー企画

キャスト

	22日	23日
クルシナ	Krušina 河野克典	山本隆則
ルドミラ	Ludmila 岩井里香	山口道子
マジェンカ	Mařenka 依知川裕美	板本みどり
ミーハ	Mícha 多田羅迪夫	筒井修平
ハータ	Háta 金森静子	長谷川明子
ヴァシェック	Vašek 山岸靖	河瀬柳史
イエニーク	Jeník 饗場知昭	土師雅人
ケツアル	Kecal 浦野実成	佐藤征一郎

旅芸人の座長 Director 末 吉 利 行 福 島 明 也
 エスメラルダ Esmeralda 石 原 正 子 石 原 正 子
 インディアン Indian 福 島 明 也 末 吉 利 行

第30回

1984年9月27日(木)・28日(金)

6時半開演

郵便貯金ホール

*ごあいさつ

音楽学部長 渡辺高之助

今回、芸大管弦楽研究部の御協力を得て、芸大オペラ研究部定期公演として、モーツァルト作曲“イドメネオ”を上演することになりました。この曲は、モーツァルトが、自作のオペラ・セリアの中で、最も愛していたと云われる名曲で、実に輝かしく、劇的な力強さに満ちていると思われま。最近特に、この曲の真価が見直され、世界各地での上演を、しばしば耳にしております。

今年の四月から、コヴェントガーデン王立歌劇場及び、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場等で仕事をしておられる、ウバルド・ガルディーニ氏の御来任を得、氏の熱意ある御指導をいただいておりますが、成る可く多くを学びとる意味もあり、原語で上演することになりました。言葉の壁をのりこえて、皆が最善の努力をして参りましたが、若い学生が主体となった演奏で、至らない点も多いかと思ひます。

何分にも暖かい御批評をいただければ幸甚であります。御来聴を心から感謝いたします。

オペラ研究部長 伊藤亘行

イドメネオ 全三幕 (原語上演)

W. A. モーツァルト作曲

IDOMENEO

An opera in three acts (original version)

W. A. MOZART

指揮 松井 和彦

演出 長沼 廣光

音楽指導	U・ガルディーニ	副指揮	中 野 俊 也
装置	石 井 満	合唱指揮	高 橋 誠 也
照明	沢 田 祐 二	合唱指導	伊 藤 栄 一
衣装	渡 辺 園 子	〃	中 村 健
舞台監督	清 宮 秀 高	〃	平 野 忠 彦
演出助手	直 井 研 二	コーチ/ プロンプター	勝 郁 子

舞台監督助手	伊集院 正 則	コーチ/ チェンバロ	森 島 英 子
--------	---------	---------------	---------

大道具 NHK美術センター

照明操作 A. S. G

衣 装 東京衣装株式会社

かつら 株式会社 丸善

出 演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部
 東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生
 合 唱 東京芸術大学音楽学部声楽科3年オペラ履修生
 オーケストラ 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

キャスト

		27日	28日
イドメネオ	IDOMENEO	土 師 雅 人	鈴 木 寛 一
イダマンテ	IDAMANTE	長谷川 明子	青 木 道 子
エレットラ	ELETTRA	嶋田 貴美子	上 地 恵 美 子
イリア	ILIA	大 音 典 子	島 崎 智 子
アルパーチェ	ARBACE	河 瀬 柳 史	河 野 克 典
司祭長	GRAN SACERDOTE DI NETTUNO	山 岸 靖	山 岸 靖

ネプチューン NEPTUNE
 クレタ人 CRETESI
 //
 トロヤ人 TROIANI
 //

浦野実成 浦野実成
 花岡久子 杉山絹江
 岩本喜子 佐藤真子
 小島海治 佐藤敦史
 杉江光 岡村和幸

振付 石田種生

大・小道具 東宝舞台株式会社 照明操作 ゼネラルスタッフ
 衣装 東京衣装株式会社 かつら 株式会社丸善かつら

出演 東京芸術大学音楽学部オペラ研究部
 東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生
 合唱 東京芸術大学音楽学部声楽科3年オペラ履修生
 オーケストラ 東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部

第31回

1985年9月26日(木)・27日(金)

6時半開演

郵便貯金ホール

*ごあいさつ

音楽学部長 渡邊高之助
 オペラ研究部長 伊藤亘行

ドン・ジョヴァンニ 全二幕 (原語上演)

W. A. モーツァルト作曲

DON GIOVANNI

Opera in 2 acts (in ITALIAN)

W. A. MOZART

指揮 大町陽一郎

演出 三谷 礼二

言語音楽指導	U・ガルディーニ	副指揮	高橋 誠也
装置	三宅 景子	合唱指揮	江上 孝則
照明	沢田 祐二	合唱指導	中村 健
衣装	渡辺 園子	//	平野 忠彦
舞台監督	清宮 秀高	プロンプター	U・ガルディーニ
演出助手	直井 研二	コーチ/ チェンバロ	勝 郁子
//	国松 真知子	コーチ	小谷 彩子

キャスト

		26日	27日
ドン・ジョヴァンニ	DON GIOVANNI	勝部 太	小島聖史
ドンナ・アンナ	DONNA ANNA	島崎智子	高橋敦子
ドン・オッターヴィオ	DON OTTAVIO	宝福英樹	星 洋二
騎士長	IL COMMENDATORE	佐藤征一郎	佐藤征一郎
ドンナ・エルヴィラ	DONNA ELVIRA	柳沢涼子	丸山晴代
レポレロ	LEPORELLO	多田羅迪夫	竹沢嘉明
マゼット	MASETTO	藪西正道	黒田 博
ツェルリーナ	ZERLINA	西野 薫	百合草道子

第32回

1986年9月26日(金)・27日(土)

芝, 郵便貯金ホール

ごあいさつ

「20世紀は指揮者の時代であり、19世紀はピアニストとヴァイオリニストの時代。18世紀こそは歌手の時代であった」と述べた人がある。事実、ファリネッリやファウステイナ・ボルドーニ、クッツァーニといった名歌

手達の名声は、良きにつけ、悪きにつけ、今日まで語り草になっているが、彼等の声の器になったのは、まず第一にオペラであった。

今回、東京芸術大学音楽学部オペラ研究部が、モーツァルトの「フィガロの結婚」を取り上げるのは喜ばしい。この作品には、18世紀のオペラの伝統の、いわばエッセンスと呼ぶべきものが煮つめられている。楽しい、軽やかな運びの故に見過されがちだが、作品の背後にはさまざまな約束事がある。しかもモーツァルトの作品は、その約束事の上で自在にはばたいている。一昨年の「イドメネオ」、昨年の「ドン・ジョヴァンニ」につづいて、伊藤教授の率いるオペラ研究部は、三たびモーツァルトを取り上げ、この作品の自在の境地の扉を明けようとするのである。心から成功を祈らずにはいられない。

音楽学部長 服部幸三

*ごあいさつ

オペラ研究部長 伊藤亘行

フィガロの結婚 全四幕 (原語上演)

W. A. モーツァルト作曲 L. ダ・ポンテ台本

LE NOZZE DI FIGARO

Opera in 4 acts (in ITALIAN)

W. A. MOZART

指揮 佐藤功太郎 演出 ウバルド・ガルディーニ

装置	川口直次	副指揮	江上孝則
照明	奥畑康夫	合唱指揮	〃
衣裳	渡辺園子	チェンバロ	森島英子
振付	石田種生	コーチ	松井和彦
舞台監督	清宮秀高	〃	田中梢
演出助手	直井研二	〃	森島英子
〃	国松真知子		

舞台監督助手 賀川祐之

〃 近江 養

大・小道具	東宝舞台株式会社	照明操作	A. S. G.
衣裳	東京衣裳株式会社	かつら	株式会社 丸善
出演	東京芸術大学音楽学部オペラ研究部 東京芸術大学大学院音楽研究科オペラ専攻生		
合唱	東京芸術大学音楽学部声楽科3年オペラ履修生		
オーケストラ	東京芸術大学音楽学部管弦楽研究部		

キャスト

		26日	27日
アルマヴィヴァ伯爵	Il Conte Almaviva	黒田 博	福島明也
伯爵夫人	La Contessa Almaviva	河添 富士子	小林 久美子
スザンナ	Susanna	加納 香子	横山 美奈
フィガロ	Figaro	藪西 正道	高橋 啓三
ケルビーノ	Cherubino	青木 道子	西川 裕子
マルチェリーナ	Marcellina	河野 めぐみ	内田 裕子
バジーリオ	Basilio	篠崎 義昭	絹川 文仁
ドン・クルツィオ	Don Curzio	岡崎 勝久	宝福 英樹
バルトロ	Bartolo	片桐 直樹	佐藤 征一郎
アントニオ	Antonio	桑原 英明	杉江 光
バルバリーナ	Barbarina	百合草 道子	高橋 敦子
花娘 1	Fanciulla 1	天羽 明恵	永石 菊乃
〃 2	2	松田 美穂	小畑 朱実
農夫, 客, 狩人, 召使			